
失われた恋人～時に消えた伝説～

佐月夏蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

失われた恋人〜時に消えた伝説〜

【Nコード】

N8495S

【作者名】

佐月夏蓮

【あらすじ】

古の時代、大きな部落があった。その部落を護るのは強大な力を誇るひとりの巫女。

どんな驚沢をすることも許されている代わりに、巫女となった者は平凡な人としての幸せを知ることが許されない。

恋することが許されない巫女が恋を知ったとき、運命は大きく動き出すのだった。

この物語は現在「蒼月華」というブログで配信中の作品です。

毎週月曜日配信予定。

序章（前書き）

ファンタジーな恋愛を書きたくて、ずっと頭の中にあったストーリーを纏めてみました。

佐月夏蓮の最初の物語。

気に入って頂けると幸いです。

序章

時は伝説の彼方に眠る時代。

人々の中で信仰は生きていて、託宣によって政治を取り決めていた。

そのため巫女や神官はとても大切にされる。

特に力ある巫女や神官は大切にされありとあらゆる贅沢が許される。

だが、そのかわり人としての幸せを得ることはない。

聖なる力は俗世の汚れを知ると失われると言われていて、巫女の場合も神官の場合も、神殿に閉じ込められたまま生涯を閉じる。

そうして力が失われると放逐されるのが現状だ。

部落を護れるあいだは大事にされるが、力を失ったとたん掌を返されるのだ。

だが、それでも巫女や神官なくして政治は成り立たない。

また巫女や神官の守護をなくした部落は滅びるのである。

そんな思想がゆるゆると蔓延していく世代。

大きな部落があり、そこもまた巫女の力によって統治されていた。

これはそんな小さなどこにでもある神話のひとつ。

今では語られない伝説の逸話である。

第1章 落ちこぼれ剣士(1) (前書き)

ブログ「蒼月華」で配信中の作品です。

第1章 落ちこぼれ剣士(1)

緑豊かな部落があった。

その最奥にあるのは他の部落の侵入に備えて構築された神殿である。

そこに住まうことが許されているのは、代々、部落を護る巫女だった。

生まれ落ちてすぐ巫女としての素質を認められると神殿へと引き取られ、先代の巫女が力を失う前に育てられる。

そうして代々、ひとりの巫女によって護られてきたのである。

現在、巫女の座にあるものはまだ年若い少女であった。

美少女として噂される巫女の名は瑠璃といった。

まだ陽が高く夏の終わりを感じさせる気候を肌で感じながら瑠璃はため息をつく。

ぬばたまの黒髪とまで言われる長い髪を、お傍付きの由希にすいてもらいながら。

まだ15、6といった幼い少女である。

美少女と噂されるだけあって、かなり整った顔立ちをしているが、年齢より幼くみえるのが悩みの種だった。

瑠璃が巫女となったのは数年前で、それまでは後継として育てられていた。

先代の巫女が力を失い、後年、亡くなったのだが、それ以後に瑠璃は正式に巫女を名乗ったのである。

一番遊びたい盛りに重責を背負う身となり、それ以来、瑠璃はため息ばかりついている。

「どうかなさったのですか、瑠璃さま？」

幼いころから傍にいてくれる由希の声に、瑠璃はそっと微笑んでみせた。

「なんでもないのよ。みて。外はすっかり秋よ？ 紅葉がきれいね」

瞳を細めて窓の外を眺める瑠璃も十分に美しい。

尤も。

巫女の外見を知っているのは、ほんの一握りの者だけなのだが。

「紅葉といっても瑠璃さま。まだ夏の終わりですよ？」

からかうような声に、瑠璃がクスツと笑う。

景色は夏のような秋のような、ふしぎな感じを讚えている。

たしかに秋の紅葉も見事だったが、まだ夏を感じさせる青空も広がっていて、とてもふしぎな感じをみる者に与えるのだ。

瑠璃は今の季節が一番好きだった。

まあお傍付きの由希に言わせると衣装選びに困るこの時期はあまり好きではないらしいが。

薄着にすればいいのか、それとも秋用にするべきか悩むのだという。

たしかに半袖だと寒いし、長袖だと暑い。

そういう気候ではあるのだが。

「どうして巫女は外に出てはいけないのかしらね？」

憂い顔の問いかけに由希は答えを返せない。

由希は瑠璃が選ばれたときに、村で一番年齢が近いということでお傍付きに選ばれた村一番の大富豪のひとり娘である。

村長とも親しい間柄の娘で瑠璃には言えないが、彼女の監視役でもあった。

おそらく聡明な彼女は、そのことも承知しているのだろうが。

お互いに隠していることはあるのだが、どちらもが友情を寄せている。

由希は立場柄、態度には出せないものの、自由のない瑠璃を可哀想だと思っていたし、主従関係ではなく友達として大好きだった。

それは瑠璃も同じなのか、由希には親しげに接してくれる。

籠の鳥のように閉じ込められて、大切にはされているが自由がまったくない瑠璃。

こんな小さな自分でも、大好きな彼女の力になれないか。

最近はそのことばかり考えていた。

「瑠璃さまは変わっておられますね。代々巫女さまといえは神秘の代名詞と言われる高貴な方々ですのに、普通の女の子のような夢をみていらっしやる」

「巫女だなんていっても、わたしは普通の女の子よ、由希」

憂い顔でそういわれ「そうですね」とうなずいた。

瑠璃の夢は外に出て自由に振る舞うこと。

巫女でなければ出てこない夢だ。

それほど窮屈な暮らしが辛いのだろう。

可哀想に……とため息が出る。

監視役のくせに友情を寄せるのはいけないことなのだろうか。

なんとかして瑠璃に笑ってもらいたい。

そう願うこともいけないことなのだろうか。

ため息が止まらない。

巫女は驚沢な暮らしができる。

その証拠に瑠璃の衣装は、由希でさえ着られないような最高級の絹の、それも綾織りだ。

純白の衣装が濡れたような黒髪によく映える。

けれど、彼女は着飾られただけのきれいな小鳥。

それを知っているから、いつも憂い顔。

自分になにができるだろう？

自問自答しても答えは出なかった。

「おい。あいつが本当にあの天才剣士なのか？」

ひそひそとささやき合う声が聞こえて、藁の山に身を横たえていた青年が、ふっと目を開けた。

すこし離れたところに、ふたりの青年が立っていて、ひそひそと

会話を交わしている。

「伝説的な強さを誇っていると聞いたが、さっきから寝てるだけだぞ？」

「たしか……決して本気にならない天才剣士……だったっけ？」

ひそひそと交わされる噂話。

真弥には慣れた会話だった。

興味も失せてそのまままた眠ろうとする。

そこへ声が投げられた。

「よお、真弥。また寝てるのか？」

億劫そうに目を開ければ、幼なじみの勇人が顔を覗き込んでいた。

茶色の瞳が面白そうに輝いている。

真弥の名を聞いて噂話を交わしていたふたりは、またひそひそと話し出した。

「やっぱりあいつみたいだぞ」

「真弥って呼ばれてるもんな」

ふたりの会話を聞きながら（らしくなくて悪かったね）と、真弥は内心で腹を立てる。

噂だけを聞いてやってくる連中には、ほとほと困り果てているのだ。

どんな噂を聞いているのかは知らないが、真弥の噂というのは実物との落差が激しいらしく、やってきた者はみな、あんな反応をみせるのである。

いちいち落胆される真弥は、相手をするのもバカらしくなってきた。

「また噂されてるみたいだな、おまえ。で。呆れられてるわけだ？」

「過剰な期待をしてほしいなんて、ぼくが頼んだわけじゃないよ、
勇人」

睨み付ける真弥に勇人は悪びれずに笑ってみせた。

「ぼくはただの落ちこぼれ剣士だっていうのに、なんだって噂になるんだか……」

自分で自分のことを落ちこぼれ剣士という真弥に、勇人が呆れたような顔をする。

たしかに真弥は仲間内では落ちこぼれ剣士と呼ばれている。

が、その腕前は決して落ちこぼれてはいない。

真弥の腕前はほとんど伝説と化しているほどだ。

落ちこぼれ剣士の謂れは、真弥のその性格にあった。

優しすぎて人を殺せないのである。

たとえそこが戦場でも。

勇人はそれをよく知っていた。

真弥は伝説化されるほどの実力の持ち主で、落ちこぼれ剣士と揶揄される影で、決して本気にならない天才剣士とも言われていた。

それが近隣に広まって見物客がやってくるのである。

たまに真弥をなめてかかって仕掛ける者もいたが、そういう者は真弥に徹底的にやられている。

真弥は人を殺したり傷つけたりできないだけで、試合で負けたことは一度もないのだから。

それが剣であれ、槍であれ、弓であれ。

これで戦場で本領を發揮できるば……とは、彼の性格を知っていて、処遇に困っている上役たちの口癖だった。

「腕は悪くないのになあ、真弥って」

「いくら腕がよくても実戦で通用しないと意味がないよ。別に殺したいとは思わないけどね」

「真弥ってほんとわからねえ奴だよなあ。それだけの腕があれば、どんな出世だってし放題だっていうのに、自分から足蹴にしてんだ

からさ。狩りだっていつもおまえひとりが獲物に逃げられてるし…
…」

事実である。

真弥は別に人間だけがダメなわけではないのだ。

生命あるものに刃を向けることが、どうしてもできないのである。

だから、狩りも苦手だった。

實力だけでいえば、そうとうなものなのだが……。

第1章 落ちこぼれ剣士(2) (前書き)

ブログ「蒼月華」で配信中の作品です。

第1章 落ちこぼれ剣士(2)

「ほんと自分でも思うよ。なんでぼくはこんなむいてない職業についてるんだろって。」

いくら両親の遺言とはいえ、もうすこし考えて決めればよかったよ。つくづくぼくにはむいてないと思うから」

「そうか？ おまえほどの腕があつてむいてなかったら、みんなクズじゃないか」

そこまで言われると困るのだがと、真弥の顔に書いている。

ふたりの会話を聞いていた傍観者たちは、真弥の事情を知って呆れたような顔をしている。

天才と呼ぶにふさわしい才能の持ち主らしいが、それを発揮できないのでは宝の持ち腐れである。

これで試合になると負け知らずなのだから、それは妙な噂も広がるだろう。

「別におまえが選んだ生き方にケチをつける気なんてないけどな。

こんなご時世なんだ。もうすこし真剣になれよ、真弥。そんな調子じゃあ、いつかおまえが殺されるぞ?」

「それもいいんじゃない?」

あっさりした真弥に勇人が絶句する。

気負いもなにもないから真弥は怖いのだ。

鷹揚で人当たりがよくて真弥は温厚な人柄だと思われがちだが、その実かなり冷酷というか、冷淡な面も持っていた。

生きることに執着していないのだ。

別に死にたいわけではないらしいが。

流されて生きているというか、現実味が伴わない人物なのである。

そのせいか真弥をみていると神秘的だという噂もあった。

真弥という青年はふしぎな青年だと。

「とにかく西の部落と戦になるかもしれないんだ。今度こそ初陣だつて覚悟してろよ?」

「何度目の初陣かわかってて言ってるわけかい、勇人?」

呆れたような口調に睨み付けると、真弥は肩を竦めてみせた。

そのまま眠ってしまうつもりなのか、もう勇人には意識も向けずに目を閉じる。

扱いにくい奴だため息をつきながら、勇人もその場を後にした。

やはり子供のころに両親を亡くしたからだろうか。真弥がすべてに対して投げやりなのは。

なにも持っていないと、あんなふうになるのだろうか。

可哀想な奴だと、ちょっとため息が出た。

「いいですね？ 絶対にカツラをとったらダメですからね？ 瑠璃さまの黒髪は目立ちすぎますから。」

それと必ず少年らしい言動をとるようにしてください。瑠璃さまがお戻りになれるまでの短いあいだなら、あたしがなんとかごまかしますから」

そういつて由希に送り出してもらったのは、ついさっきの出来事である。

本当はひとりの時間の長い昼に出してくれるつもりだったらしいのだが、支度が長引いて、こんな時間になったのだった。

なんの支度かといえば、瑠璃をみれば一目瞭然。

少年らしい髪形の亜麻色の髪のカツラ。どこにでもいる子供が身に付けているような男物の衣装。

瑠璃は男装して抜け出しているのだ。

これをすべて用意してくれたのは由希である。

彼女の家が富豪だからできることで、実際バレれば彼女が責に問われるのだが、それでも由希は瑠璃のために動いてくれた。

だから、彼女に迷惑がかからないように、瑠璃は細心の注意を払わなければならない。

ただ……最初は男物の服なんて身に付けたこともなくて、脚を出す装いなんて初めてだったから、かなりの抵抗があった。

恥ずかしかったし。

でも、神殿からすこし村に近づくと、見知らぬ光景が広がっていて、すぐに忘れてしまった。

物珍しくてきよろきよろと歩いている。

忙しく行き交う大人たち。楽しそうに遊んで回る子供たち。

子供らしい遊びなんてしたこともない瑠璃は、ちょっと羨ましかった。

刈り入れに向かって動き出しているのか、今年も豊作のようだ。

これなら食糧の心配はせずに済むだろう。

きよろきよろとみて歩いて、どのくらい経っただろう？

厩舎の近くで眼が止まった。倒れているのか、眠っているのかは不明だが、男の子が倒れている。

藁の山に埋もれるようにして。

外で眠るといふ常識のない瑠璃は慌ててしまった。

倒れているのなら薬師を呼ばないといけない。

おずおずと近づいても、青年は起きる気配がなかった。

やはり倒れているのだろうか？ これって行き倒れ？

乏しい知識が脳裏に浮かぶ。

「あの……大丈夫？ 倒れてるの？」

おそろおそろ声を投げれば、ようやく青年が目をあけた。

やっと気づいたと言いたげに。

ちょっと驚いた顔をされて、どうして驚くのだろうと身を引いてしまった。

真弥は気配も感じさせなかったことで驚いたのだが、当然のこととして常識に疎い瑠璃はわからなかった。

「あれ？ もしかして変な心配をさせたかな？ 眠ってただけだから、別に心配はいらないよ。驚かせてごめん」

「眠ってたってもう秋なのに」

「別に風邪をひくほど寒くもないよ。頭を冷やすにはちょうどいい。それより見かけない子供だな。余所者か？」

「うっん。あんまり家から外に出たことがないだけ……だよ」

語尾が女言葉になりそうになって、慌てて付け足した。

気づかないほど鈍いのか、真弥はにっこり笑って起き出した。

おどおどとしている瑠璃の顔を覗き込んで。

「ぼくは真弥。きみは？」

名前なんて用意していなかったので、訊かれたときつい本名を名乗ってしまった。

「瑠璃よ……じゃない、だよ」

怪しい言葉遣いなのだが、真弥は気にしない夕子なのか、おかしそうに笑っただけだった。

「なんだ。顔も女の子みたいだと思ってたけど、名前もそうなんだ？ 別にどっちもきみのせいじゃないけど」

巫女の名は知られていないらしいと由希から聞いていたが、どうやら本当らしい。

本名を名乗ってしまったって、一瞬悟られるかと怯えたけれど、真弥はなにも気づかなかった。

ふしぎな黒い瞳。

子供のように純粹で、大人びた叡知があつて。

ふしぎな人。

「剣を持っているの……剣士？」

女言葉になりそうになると、慌てて語尾をかえる瑠璃に、真弥も一瞬、怪訝そうな顔をする。

だが、すぐに破顔した。

あまり詮索しない人柄なのかもしれない。

「部隊の足を引っ張ってるしがない落ちこぼれ剣士さ」

「落ちこぼれ？」

剣士がどういう職業で、戦がどういうものか、このころの瑠璃はなにも知らなかった。

なにひとつ知らされず、大人たちの都合のいいように託宣させられてきたのである。

ただ剣がどんな物かは知っていて、それで出た問いに過ぎなかった。

だから、この問いに対する真弥の返答は、瑠璃にはかなり意外なものだった。

「人を殺せないんだよ。剣士とか武闘家とか、戦うために生きている者は、人を殺すのが仕事だからね。人を殺せない剣士なんて、落

ちこぼれと言われても無理はないんだ」

知らなかったことを知らされ、瑠璃は青ざめた。

今まで数度とはいえ、戦の託宣を求められ、瑠璃はその許可を出している。

そのときの村長の言い分では、自分たちの身を護るためだけで、だれも傷つけないとのことだった。

ただ護るだけだと。

だから、許可したのに……その剣士の仕事人が人を殺すこと？

「なにを青ざめてるんだ？」

問われても瑠璃にはなにも言えず、かぶりを振るしかなかった。

人を殺すことが戦いを生業とする者の仕事だという。だが、彼は人を殺せないと言った。

それはどういう意味だろうか？

「人を殺せないとうなるの？」

「そうだね。時と場合によるけど、まあケガをして帰ってくるか、運が悪ければ自分が死ぬか、どちらかだと思う。今のところ、ぼくは無事だけだ」

すこしホッとした。

現実的には受け止められなくても、人を殺すことが罪だということとは、巫女である瑠璃にはわかるので。

第1章 落ちこぼれ剣士(3) (前書き)

ブログ「蒼月華」で配信中の作品です。

第1章 落ちこぼれ剣士(3)

「人を殺せないと落ちこぼれなの……か？」

なんだか変な話し方をする奴だと顔に書いて、真弥が苦笑した。

「言っただろう？ 剣士の仕事は人を殺すことだって。人を殺せない剣士なんて、ただのお荷物に過ぎないんだよ。実際、何度ももう情けをかけずに殺せつて責められてるしね」

「でも、真弥は殺さないんだろう？」

「殺さないというよりも殺せないだけだけど」

「自分を責める必要はないと思う。どんな理由があれ、人を殺せばそれは罪だよ。戦が人の生命を奪うものなら、それは天に背く行い。いずれ天罰がくだるわ……よ」

巫女として話しそうになってしまい、慌てて男言葉を付け足す瑠璃を、真弥はマジマジと見上げていた。

藁の上に腰掛けたまま。

自分の気持ちを先取りされて、指摘されたのは初めてだったので。

「ふしぎな子供だな」

立ち上がって頭を撫でられて瑠璃はちょっと焦った。

カッラがとれたらどうしよう。

アワワと慌てる瑠璃に真弥が吹き出す。

なんだかちよつと恥ずかしかった。

「小さいな。いったい幾つなんだ？」

ふしぎそうに真弥が問う。

「子供っぽくて悪かったね。これでも15だよ。真弥は？」

「ごめん。15だったんだ？ ぼくは17だよ。ふたつしか変わらないのに、子供だなんて言われたくないよね。ほんとごめん」

言いすぎたと言いたげに真弥が何度も頭を掻いている。

まあ瑠璃が童顔なのはたしかだし、本当は女の子なんだから、男の子としてみたら子供に見えるものかもしれないが。

「もつ……帰るの？」

「別に急いで帰るわけじゃないけど」

なにが言いたいのかわからないと真弥は首を傾げている。

瑠璃はどうしても直接、戦場に出る真弥から、戦について詳しいことを聞きたかった。

自分が知らされなかった現実を知りたかったのである。

それが村長たちには歓迎できない知識だとしても。

人の生命を奪うことに許可なんて出せない。

「あのね、戦についてとか、剣士の役目とか、そういうことについて詳しいことを教えてほしいんだ。どうして戦が起きるのかとか、どうすれば起きずに済むのかとか。ダメ？」

「別にだれでも知っていることだから、ぼくは構わないけど、そういうことを知る必要があるのかい？」

真弥の問いかけには答えなかった。

お忍びの瑠璃と逢っていたなんて知られたら、責任なんてなくても、真弥が責められかねない。

そんな理由は言えないが、なにか感じ取ってくれたのが、真弥はため息ひとつで同意してくれた。

「じゃあ場所をかえようか？ こういうところで堂々とする話でもないし、ぼくの考えはある意味で異端だからね。あまり人に聞かれたくないから」

「うん」

一言だけ答えて背を向ける真弥の後を追いかけた。

真弥が連れてきてくれたのは、神殿と村のちょうど中間にある、とても大きくてきれいな湖だった。

瑠璃はそれが湖だと知らなくて、あまりにきれいな湖をみて感嘆の声をあげていた。

「すごくきれい。これはなに？」

「は？ なにつて湖だけど？」

なにを言っているのかわからないとばかりに、真弥が怪訝そうな顔をする。

だが、瑠璃は好奇心が赴くままに湖に近づいていき、そっと水面に手を戯らせた。

「冷たいっ」

きゃっきゃつとはしゃぐ瑠璃に、さすがに鷹揚で呑気な楽天家の真弥も、どこかがおかしいと気づきはじめた。

どこからどうみても普通じゃない。

そういえば言葉遣いも、時々、あきらかに怪しいときがある。

言いなれた言葉遣いで答えかけて、慌てて言い直したみたいな、奇妙な違和感があった。

そういつときにとびだすのは、たいてい女言葉である。

そして女の子そのものの優しい顔立ち。服装が違ったら、きっととても美しい少女にみえただろう。

(もしかしてこの子、女の子なんじゃ……)

そうと意識してみれば、身体付きは頼りないし、華奢で優しい外見をしていて、とても同性にはみえなかった。

でも、瑠璃は余所者ではないと言った。

真弥はある特殊な事情から、部落に通じている。

その真弥が瑠璃と同じ年頃の女の子がいる家に心当たりがないのだ。

知っている範囲内に瑠璃に似た少女はいない。

では瑠璃は嘘をついているのだろうか？

他の部落からこの部落の内情を探りにきた、とか？

巫女の守護をいただく部落や国は、それほど多くはない。

ましてこの部落を護る巫女の力は周囲から一目置かれるほどの強さだ。

外敵は常に狙っているだろう。

だから、素性を偽って探りにきても、別にふしぎはないと知って

いる。

だが……。

自問自答をくりかえす真弥の目の前で、瑠璃はしきりにはしゃいでいる。

まるで水に触るのも初めてだと言いたげに。

その笑顔は無邪気で、そんな陰謀を隠しているようにはみえなかった。

ましてさつきからあまりに露呈しすぎている。

間諜だったら、もうすこし上手くやるだろう。

あの笑顔は偽りじゃない。

そのていどのが見抜けない真弥ではなかった。

が、そうなるとあの「瑠璃」と名乗っている子供の素性は、まったくわからなくなるのだから。

(悪い子じゃなさそうだけど、怪しいのは怪しいよね。いったいだれなんだろう？ すこし付き合ってみればわかるかな？ 疑いが疑いにすぎないかどうか)

第1章 落ちこぼれ剣士(4) (前書き)

ブログ「蒼月華」で配信中の作品です。

第1章 落ちこぼれ剣士(4)

「水を触るのがそんなに気持ちいいのか、瑠璃？」

「とつてもっ。こんなに冷たいなんて知らなかった」

振り向いた瑠璃に笑顔で言われ、真弥はちよつと赤くなった。

瑠璃が少女かもしれないと疑惑を抱いたせいだったが。

「湖つてどうしてこんなにきれいな？ どうしてこんなに大きい
の？」

はしゃいで問われて真弥は呆れてしまった。

興奮しているせいか、言葉遣いを変だ。

隠すのを忘れているとしか思えない。

どこから聞いても女言葉である。

(やっぱりこの子、女の子なんだ。にしても、ちよつとひどくない
かい？ これで性別や素性を隠そうとするのは無謀だ)

思わず複雑な気分になる真弥である。

瑠璃はあまりに世間知らずすぎた。

これでは素顔で接していたら、瑠璃を騙して手に入れようとする男なんて、さぞ大勢いるにちがいない。

その当人がこれほど無防備でいいのだろうか。

自分が性別や素性を偽っていることすら忘れている。

おそらく本来は素直で嘘なんてつけない少女なのだろう。

真弥が1番親しい少女は、どちらかといえばワガママで、いつも振り回してくれる。

そういう意味で瑠璃のような少女は意外ですらあった。

こんな娘もいるんだ？

と、妙に感心してしまっていた。

(なんとなく可愛いね。口に出したら赤くなりそうだけど)

クスクスと笑う。

その笑顔で我に返ったのか。

瑠璃が困ったような顔になった。

どうやら自分のはしゃぎすぎて、羽目を外したことに気づいたら
し。

これではイジメているようだ。

これは話題を変えるしかないらしい。

本来なら突っ込むべき場面かもしれない。

だが、真弥にはどうしても瑠璃が間諜だとは思えなかった。

だとしたらとんだ無能者である。

どうして素性を隠すのか、どうして性別を偽るのか。

それは付き合ってみればわかる日があるかもしれない。

そう判断をください。

「夏の終わりとはいえさすがに日が暮れるから、あまり遅くなると危ないよ?」

「うん」

ここへきた目的に対するものだと知って、瑠璃がふしぎそうな顔になる。

バレていないのだろうか?

すっかり隠すのを忘れていたのだが。

まあいい。

今は知りたいことを訊ねるべきだから。

真弥が自然に湖の畔に腰かけて、瑠璃がちゅうちょしていると声を投げてきた。

「座らないの？」

「え？ でも、土の上に直になんて」

呆れる深窓の令嬢のとき発言に、さすがの真弥もあっけに取られた。

村長の娘でもこんなことは言わないだろう。

村長と呼ばれているが、他の部落や国と比較して言うなら、一応、国主である。

つまりその娘は王女と呼ばれるべき立場なのだ。

真弥は安岐やすきのことはよく知っている。

その安岐ですら、こんな言葉は言ったことがない。

いったいどういふ育ちなのだろうか。

「気になるなら、これでどうかな？」

呆れつつも手持ちの布を隣に敷いてやる。

すると、瑠璃はあからさまにホッとした顔をした。

それでも何故か近づいてこない。

(?)

しばらく見上げていると、真弥とその距離を見比べているようだった。

(ぶっん)

と、ひとり納得する。

(この娘ってどうやら男と付き合ったことがないんだね)

それがはっきりわかるほど恥じらっている。

(たぶん近づいたこともない。それで迷ってるんだ？ いったいどんな立場の姫なんだ?)

さすがに非常識な瑠璃に悩んでしまう。

もうすこし離そうかと思ったところで、瑠璃がおすおすと近づいてきた。

そのままおっかなびっくり隣に腰かける。

ここまで怯えられると、なんだかなあといった気分だった。

それでもすごく勇気を出したのだろうということとは、すぐに見抜

ける。

臆病な娘ではないらしい。

それに戦について知りたいと言ったときの眼。

あれはふしぎな瞳だった。

まるですべての責を負っているかのような厳しい瞳だった。

現実から眼を背けずに受け入れようとする者の眼をしていた。

だから、断りきれなくてここにいるのだ。

本当にこの瑠璃と名乗っている、自称少年はいったい何者なんだ
ろっつ？

第1章 落ちこぼれ剣士(5) (前書き)

ブログ「蒼月華」で配信中の作品です。

第1章 落ちこぼれ剣士(5)

「それでなにを知りたいって？ ぼくに答えられることなら答えるけど？」

「うん。戦について知りたい」

「大雑把に戦と言われてもね。それこそ規模も理由も様々だし」

困ったように言うと瑠璃が隣から見上げてきた。

振り向いた黒い瞳に違和感を感じる。

瞳も睫毛も黒、だ。

伏せられたらさぞ長いのではないかと思わせる睫毛が震えている。

なのに髪は亜麻色？

怪訝に思ったが真弥にはわからなかった。

この当時、カツラは非常に高価な代物だったので、その名前すら知らない者の方が多かったために。

「じゃあ半年前に起きた戦は？ あの理由はなんだったの？」

「半年前って弥の国とやりあったときのことかな？ どうしてきみがそんなことを知っているんだい？」

真弥の問いには複雑な意味があった。

瑠璃が女の子だと、ほぼ確信している真弥には、瑠璃がそういうことを知っている方がおかしかったのだ。

戦いを生業とする者や、それに関わった者は知っているだろう。

だが、部落の大部分の者は詳しいことを知らされない。

それが戦の常である。

特にこの部落は大きい。

戦う者と護られる者。

その区別ははっきりしている。

剣士の仕事がなにか。

そんなことすら知らなかった瑠璃が、知っていても構わない知識ではないのだ。

が、やはり瑠璃には通じなかった。

よほど世間を知らないらしい。

「あの戦はどうして起きたの？ 向こうが仕掛けてきたから？ この部落を護るため？」

真面目な顔で言われ、どっという意味だろうと悩んでしまった。

「どこから出るわけだい？ その理由は？」

「どっつて……その……」

まさか戦の託宣を求められたときに、理由として村長から聞いたとも言えず、瑠璃は口ごもった。

これは言えないらしいと判断して、真弥が呆れたように言い返した。

「あれはどちらが悪いとも言えないね」

「何故？」

「だって領土を奪いあっただけだから」

あっさり言われて瑠璃は絶句した。

そんな理由で戦を起こし、人々が生命をかけたのか？

「弥の国はね。かなり豊かではあるけれど、弱小国でもあったからね」

それは瑠璃も知っている。

だから、仕掛けてきたと聞いて驚いたのだから。

「当時は軍事力の強化を図っていて、この部落にも目をつけていたんだよ」

ここまででは瑠璃が聞いていたとおりだ。

どこから事実がねじ曲げられたのだろうか？

「なにしろこの部落を護る巫女殿は、この近隣でも1、2を争う能力の保持者。欲しがる者は後を絶たないからね」

（わたしが原因？）

声にならない声で呟いて、瑠璃は震えだす。

知らなかった自分の価値を知らされて。

「それにこの部落は国ではないけれど、国といっても通用するほど領土が広いだろう？ だから、まあそういう小競り合いはよくあるんだよ」

思いもしなかったことを告げられて瑠璃はため息をつく。

「戦のときに非難されないやり方で戦おうと思ったら、相手に先に攻めさせればいい。そうすれば正当な理由ができて、相手の領土を奪うために戦いを仕掛けられる。あれはそういう戦だったよ」

戦が勝利したことは知っている。

では、弥の国はどうなった？

「弥の国はどうなったの？」

「滅んだよ」

身体を小刻みに震えさせる瑠璃に、いったいなにをそんなに衝撃を受けているのだろうか？ と、真弥がふしぎそうな顔をしている。

「今では弥の国の領土はこの部落の一部だよ」

「そこに住んでいた人々はどうなったの？ 戦に負けるとどうなるの？」

「そうだね。王とか、そういう君主の血筋の者は、たいてい殺されるかな？」

それは巫女である瑠璃も含まれるのだろうか？

この部落を事実上、統べているのは瑠璃なのだか。

だが、力ある巫女を殺すのは絶対的な禁忌。

ではどうなるのだろうか。

「例外は巫女や神官だね。彼らだけは生け捕りにされる。守り神はどこだってほしいから。後の人々はたいていは奴隷かな」

「奴隷」

たしかにそういう身分の者はこの部落にもいると聞いている。

だか、瑠璃はそういう人々にも普通の暮らしをさせてほしいと、何度も村長に注意した。

聞き入れられているかどうかは、瑠璃に確かめる手立てはなかったが。

第1章 落ちこぼれ剣士(6) (前書き)

ブログ「蒼月華」で配信中の作品です。

第1章 落ちこぼれ剣士(6)

結局、瑠璃は託宣するだけの巫女で、実質的な権限はすべて村長のもの。

ただ瑠璃の託宣なくして村長が動けないというだけのものだった。

だから、瑠璃が奴隷たちを庇っている以上、そうひどい扱いは受けないはずだ。

それは瑠璃の託宣に背くことだから。

巫女が口にしたことはすべて託宣。

特にそれが「望み」という形であれば、すべて意味を伴う。

だから、安心していただけのだが、本当のところはどうなんだろう？

「この部落にも奴隷はいるよね？ 彼らはどういった扱いになっているの？」

「そうひどい扱いではないと思うよ。むしろ厚遇されている方じゃないかな？」

そう言われてホッとした。

「なんでも巫女殿がいやがるらしくて、村長も手が出せないらしいから。巫女の託宣に背くととんでもない事態になるからね」

「……それって村長は不本意ってこと？」

「そりゃあ奴隷は貴重な労働力だから」

「奴隷といっても同じ人間よ。生命の価値に貴賤はないわっ」

思わず叫んでしまったが、言葉遣いを直していないことにも気づかなかった。

そのくらい腹を立てていたのだ。

知らなかったではすまない。

では瑠璃がもし奴隷のことなど意識も向けなければ、彼らは人間らしい扱いしてもらえず、いつかは病にかかり死んでいったことだろう。

無知とはなんて重い罪なのか。

瑠璃が憤っているのを間近でみて、真弥はまた驚いていた。

ふしぎな考え方をする娘だと。

それは真弥自身の考えでもあった。

今まではだれも同意してくれなかったけれど。

「奇遇だね。ほくも同じ意見だよ」

「え……」

「ただね、今の殺伐とした時代では、ぼくや瑠璃みたいな考え方は、かなり異端なんだよ」

「異端」

「殺し合つのが常識で、人を殺した数が手柄になるような時代だよ？」

言われて瑠璃はなにも言い返せなかった。

間違っているのは周囲の方だと思つのに。

「滅ぼされた国の人間が奴隷になり、働かされて死んでいくのも常識。普通はそう考えてる」

どう言えばうまく伝わるのか自信がない。

でも、そんな考え方を当然のこととして受け入れたくなかった。

「だから、ぼくはあそこではぼくの見解は言えないって言ったんだよ。傍で聞いていたただれかから、村長や隊長の耳に入ると、また責められるからね」

「そんな……自分の意見さえ堂々と言えないなんて」

瑠璃は憤ったが真弥は小さく笑った。

「別にぼくは気にしないよ？ さっきも言ったけど、ぼくは人を殺せない落ちこぼれ剣士だから、ある意味で異端視されているし、そ

ういう注意を受けるのも珍しくないから」

それだけ瑠璃や真弥みたいな考え方が異端なのだろう。

「でも、きみを巻き添えにはできないからね。あのときのきみは戦がなんであるのかも知らなかった。剣士の役割も知らなかったくらいだしね」

たしかに今まで知らなかった。

自分が如何に無知だったか、今日1日で思い知らされた。

「それがわかっていると、あそこでうかつに説明できなかったんだ。よけいな知識を吹き込むなって責められただろうから」

肩を竦めて笑う真弥に、瑠璃はふしぎそうに彼を見つめていた。

子供のように無邪気に見えるのに、大人びた叡知を秘めた瞳をしていると。

それは彼の考え方のせいなのだろう。

異端、かもしれない。

瑠璃も扱いにくい巫女と言われているから。

瑠璃や真弥の考え方は、周囲にはただのお荷物かもしれない。

でも、自分たちが間違っているとは思えない。

間違っているのは領土を奪うために簡単に人を殺せる人々だ。

「いつか」

「え？」

いきなり俯いたかと思ったら、瑠璃が話し出してびっくりした。

とても神秘的な表情を浮かべていたから。

「いつか報いがこの部落を襲うわ」

「瑠璃」

「天地あめつちに背き、同胞はらからの生命を奪う。それは忌むべき行い。そうして罪を重ねれば、いつか報いが襲う。どうしてわからないの？ 滅ぶのは……諸共にだというのに」

一滴、とてもきれいな雫が頬を伝って落ちた。

きれいだと思った。

姿形ではなくその心が。

今気づいたように瑠璃の顔を覗き込んで、真弥はすこし衝撃を受けた。

何故なんてわからない。

ただ見ていたかった。

そして……見ているだけの自分が切なかった。

あの後もうしばらくのあいだ、瑠璃に問われることに、真弥が答えるといふ形で会話をし、そうしてふたりは別れた。

瑠璃が知りたいことは山のようにあつて、真弥が他のことを話したくてもできないほどだった。

どうしてそこまで気にするのか。

気にならなかったと言えは嘘になる。

だが、探り出すのも気が引けるほど真剣だったので、結局、一度も問えなかった。

それに会話して性格とか考え方とか。

そういうものが理解できてくると、真弥と瑠璃には共通点がたくさん見受けられた。

共感できる部分がかなりあつたのである。

今までならだれにも理解されなかったことが、責められてきたことが、瑠璃が相手だとすんなり認められる。

受け入れられる。

そうして真弥は間違っていないと言ってくれるのだ。

どうして間違っていないと思うのか。

その具体的な理由まであげて。

瑠璃には何度も驚かされてきたが、そういうときが1番、驚かされたかもしれない。

何故なら瑠璃の主張には筋道が通っている。

きちんと意味も理屈も、そして重要性もすべてがあったからだ。

漠然とした考え方が、方向性を持たされることがあるとしたら、まさしくあの瞬間がそうだったのだろう。

瑠璃の意見を聞いて、瑠璃の考え方を聞いて、真弥は自分の考え方がおかしくないのだと自信を持てた。

間違っているのは周囲の方だと。

本当はあまりに周囲と自分の考え方が違うので、時々は不安になったのだ。

やはり真弥が甘いのかと。

人々の方が正しいのかと。

だけど裏切りや人殺しを常識として受け入れることはできなくて、

自分の考え方や理想と周囲の現実が合わなくて苦しんでいた。

瑠璃はそれに答えをくれたのだ。

それもだれが聞いても納得するきちんとした答えだ。

嬉しかった。

屁理屈とか同情ではなく真弥は正しいと言ってくれることが。

だから、そのことに気づいてからは、何度となく瑠璃ともっと他愛ない話もしたいと思った。

だが、瑠璃はあまりに生真面目すぎる。

真弥は何度か話の腰を折って、話題をずらそうとしたが、ついにできなかったのだから。

素性について訊ねようかとも思ったが、あまりに急ぎすぎでは彼女と二度と逢えない気がして、暗くなるころには苛立っていたものである。

ここで別れたら二度と逢えない気がして。

それに送っていくと言ったときにも、あっさりかわされてしまったし。

ここからなら近いからいいと言われてしまったのだ。

嘘だと思ったが、瑠璃の笑顔をみていると強気には出られない。

結局、言い負かされてしまった。

あそこから一番近いのは神殿だ。

だから、瑠璃の言葉は嘘、ということになるのだが、わかっていても逆らえなかった。

ただどうしても別れの言葉が言えなくて、動くつもりがないのか。

真弥をジツと見上げている瑠璃を見つめていると、ややあって彼女がぼつりと言った。

『どうかした？ 真弥を見送ろうと思っっているのに、こうしていらなにもできないけど？ 時間はかり過ぎちゃうよ？』

鈍すぎないかと思ったが、やっぱり瑠璃には通じなかった。

どうにも瑠璃は鈍い上に世間知らずで、意思の疎通が難しい。

まあそこがまた可愛くもあるのだが。

『また逢えるかな？ こんなふうにしていて気が合う奴って初めてで。今までは人に自分の考えを言えば、異端だって言われてきたし。瑠璃くらいなんだよ。ぼくの考えを理解してくれるのは』

逢いたい動機の半分の理由。

もう半分はどういう動機か、自分でもわかっていなかった。

どうして彼女の返事にビクビクしているのかも。

そうして返ってきた答えは、やっぱりすこし普通とは違っていた。瑠璃はあっさり笑って頷いたのだ。

なんの警戒もみせずに。

『うん。いいよ。時間の指定とか、日にちの指定とかはできないけど、時間が空いたら真弥に逢いに行くから。真弥がよく行く場所はどっっ』

言われて答えると、瑠璃は時間が空いたら捜すときはそこに行くのと、無邪気な笑顔でそう言ってくれた。

あまりに無防備なので、彼女の将来がちょっと心配になったが。

簡単に詐欺にでも遭いそうで。

それから簡単な言葉を交わして彼女とは別れたが、見送るつもりだと言った言葉は本当らしく、ジッと真弥の背中を見送っていた。

考えてみればあれも変だ。

周囲はそろそろ暗くなりはじめていたし、真弥を見送っていたりしたら、瑠璃が帰るのがもっと遅くなっただろう。

だが、瑠璃は遂にみえなくなるまで真弥を見送っていたのである。

天才剣士と言われるだけあって、真弥は気配を読むことにも長け

ている。

だからこそ、瑠璃がなんの気配も感じさせず、近づいてきたときにあれほど驚いたのだ。

真弥に気配を感じさせなかったのは、瑠璃が初めてだったので。

そうしてお互いがみえなくなるまで、瑠璃の視線は感じていた。

ジツと見送ってくれていることが肌で感じられ、ふしぎそうに振り返ったほどである。

時間的に考えれば、瑠璃の行動は不可解極まりない。

こんな時間にあんなところで別れて、彼女は無事に家に帰れたのだろうか。

今度もし逢えたら、彼女が約束を守ってくれたら、今度はきちんと送り届けようと心に決めた。

さすがにこんな時間に女の子をひとりにするのは非常識だと思えたので。

断られても送るべきだった。

そんなことを考えながら、真弥はいつも通り家の扉を潜った。

第1章 落ちこぼれ剣士(7) (前書き)

ブログ「蒼月華」で配信中の作品です。

第1章 落ちこぼれ剣士(7)

「おかえりなさい。真弥」

弾むような声が聞こえて顔をあげれば、いつもはもつすこし経たないと戻っていない少女が佇んでいた。

「由希？ どうしたんだい？ こんな時間に戻ってくるなんて珍しいね。巫女殿のお世話のために陽が暮れるまで神殿にいるきみが」

真弥が驚いてそう言えば、由希は肩を竦めてみせた。

「巫女さまがお疲れになったとかで、早く休まれてしまったの。それでお役御免になったというわけ」

「ふうん」

巫女の話は部落の中でも禁句だ。

情報が漏れないために、その名さえ口にされない。

だが、真弥は巫女のお傍付きの由希の幼なじみにして、現在は同居している身なので、普通よりは詳しくかった。

さすがに姿や名前は知らないが。

由希は村1番の富豪の娘で、由希の父と真弥の父が親友だったのだ。

だから、真弥が両親を亡くしたとき、なんの迷いもなく引き取ってくれた。

正直そろそろ独立しようかな？ とは、考えていることなのだが、別にここにいるのが息苦しいわけじゃない。

まあ独り立ちできる年齢になってまで、おじさんの厚意に甘えているのはどうかな？ とは、思っているが。

だからといって迷惑だから、早く独立したいと思いつめていてもないのだ。

むしろ血の繋がりもなく、ただの親友の子供と思えば、よくしてくれているほうだ。

それでもやはり独立できる年齢になったのだから、そろそろ自活しないと心に決めていた。

それが実行できないのは、ひとえに由希に理由があった。

由希はどういうわけか、子供の頃から真弥になついている。

しかも大富豪のお嬢さまらしくワガママである。

真弥が他の女の子と仲良くすることすら認めない。

そんな場面をみたら、その相手をイジメて、イジメて追い詰めてしまっただ。

おかげで真弥は自分から異性には近づかなくなった。

由希のためにそうしたのではなくて、彼女にイジメられる相手が可哀想だったから、というていどの理由だ。

だが、由希はどうかやら真弥に受け入れられていると誤解している節がある。

機嫌がいいときは、それなりに可愛いのだが、由希のおかげで真弥はすっかり女性不信になっていた。

別に由希がきらいなわけじゃない。

ただ由希が望むようには思えないだけで。

愛されて育てられたお嬢さまらしく、ワガママで強引な由希。

自己主張も激しくて、相手の都合など聞き入れない。

それでも非難されたことはないし、人から面と向かってきらわれたこともない。

それは別に由希にそれだけの魅力があり、人望があるからではない。

ただ単に部落でも1、2を争う大富豪のお嬢さまだから、だれも由希を怒らせることができないだけなのだ。

なのに由希はそのことにすら気づかない。

どうして理不尽なワガママが通るのか。

それでいて本当に気遣ってくれる、親しい相手ができないのは何故なのか。

由希はなにも知らない。

気づかない。

その生まれ故に。

何度かは指摘してやったし、そういう態度はよくないと言ったこともある。

けれど由希が忠告を理解してくれたことはなかった。

人にきらわれるとか。

自分は間違っているとか。

そういう思考すら由希の中にはない。

だから、間違っていると言われてもわからない。

気づいてからは説得は諦めてしまっていた。

真弥と由希とでは考え方も価値観も、なにもかも違いすぎるのだ。

正直に言うなら真弥は由希のような少女は苦手ですらあった。

幼なじみとして育っていなければ、おそらく親しくすることはなかっただろう。

由希は想像したこともないようだが。

そもそも人殺しを厭い、動物にさえ刃を向けられない真弥が、由希のような少女に好意をもつはずがない。

優しさ故に本心から人をきらうことの少ない真弥だが、何事にも例外は存在する。

幼なじみということ、苦手意識を抱いていても、それを表に出すことはない。

それで由希を避けることもない。

だからといって受け入れていると、真弥は由希のものだと思われるのは、はっきり言えば迷惑だった。

由希はきらわれているなんて思っていない。

だから、待っていれば真弥は手に入る。

そう思い込んでいるようだった。

またどうして周囲にいる者が自分に忠実なのか。

その意味を理解しようとしもない傲慢な一面が由希にはある。

だが、それ故に個人的に執着している真弥を、由希から奪ってい

ける勇気のある者が、この部落にいるとは思っていない。

いたとしてもきつと居たたまれなくして追い詰めて、そうして追
い出してしまおう。

もし気の弱い娘だったら、耐えきれずに対人恐怖症になったり、
ろくに人と接することもできなくなるかもしれない。

由希の怖いところは、そうなくても罪悪感を感じないところであ
る。

思いやりという言葉を、どうやら由希は知らないようだった。

それでは人の好意は勝ち取れない。

ましてや人の心の汚い一面や、そういった傲慢さをきらう真弥が、
そんな由希に好意を寄せることなど、絶対にありえないのだ。

由希のような傲慢で自分勝手に、反省すらない少女は、真弥に
とって苦手なのだから。

そういった事実にも気づかない。

それは由希の世間知らずな甘えかもしれない。

ふつと瑠璃の笑顔が脳裏に浮かぶ。

それまで見知っていたどんな女の子とも違う反応をみせ、違う表
情をみせる少女。

彼女と一緒にいるのは苦痛ではなかった。

ああいう少女もいるのだと、もっと早く知ることができたなら、女嫌いにはならなかったかもしれないなど、真弥の顔に笑顔が浮かぶ。

第1章 落ちこぼれ剣士(8) (前書き)

ブログ「蒼月華」で配信中の作品です。

第1章 落ちこぼれ剣士(8)

「なに笑ってるの、真弥？」

自室を目指して階段を登っていた真弥に、そんな由希の声が届いた。

振り向けば怪訝そうな顔をしている。

瑠璃のことは悟られない方がいいかもしれない。

いくら彼女が素性を偽り、性別を偽っていても、女の子はえてして、そういう勘だけは鋭いものだ。

由希ならあっさり見抜くかもしれない。

そうするとあの真っ白で純粋な瑠璃が、由希にイジメられることになりかねない。

さすがにそれはいやだった。

「別になんでもないよ。今日もまた妙な噂のせいで見物人がきて、勝手に呆れて帰ったからご苦労なことだと思いついて笑っただけだから」

「いい加減、覚悟を決めたら？」

またいつもの口癖を出されてため息が出る。

「本当は真弥が揶揄されたり、呆れられるはずないじゃない。真弥ほどの実力者は他にはいないわ」

このことでは何度も由希とぶつかっていた。

決してわかり合えない価値観をぶつけ合って。

理解されないのに言い争うのは辛いものだ。

いい加減、由希にもそれをわかってほしい。

そう望むのは由希が相手では無理なのだろうか。

「真弥が本気になりさえすれば、だれも敵わないのよっ!? どうして軽蔑されるのを甘んじて受け入れるの? あなたはだれよりも強いのにっ」

由希の価値観と真弥の価値観は、これだけ違うのかと改めて感じる。

それから瑠璃と交わしたいろんな会話が脳裏をよぎった。

真弥は間違っていないと正論で指摘してくれた瑠璃。

今なら自信をもって主張できる。

自分の考え方は間違っていないのだと。

「知ってるの? 真弥の呼び名の落ちこぼれ剣士って、絶対にあなたに勝てない人たちの皮肉なのよ? 実力で敵わないからって!!」

「好きに言わせておけばいいよ。落ちこぼれ剣士おおいにけっごう。わかってくれる人は言わなくてもわかってくれるんだから」

心の底からわかってくれる人がひとりでもいる。

瑠璃がわかってくれるなら、間違っていないと言ってくれるなら、他のだれにどう思われようと構わなかった。

たった一度逢っただけ。

少ない言葉を交わしただけ。

でも、真弥の心にはしつかりと瑠璃が住み着いていた。

彼女が認めてくれるなら、すべてを敵に回しても構わない。

激しく心を支配するこの感情がなんなのか、真弥にはわからなかった。

真弥はずっとなにひとつ持っていないくて、束縛されたり強制されたりしていた。

そんな真弥にとって、そこにいると認めてくれて、間違っていないと諭してくれる瑠璃は、それだけで救いになっていた。

「あたしはっ。万が一にも真弥に戦場で死なれたくないのよっ!! どうしてわかってくれないのっ!? そのままであなたはいつか殺されるわっ。それがわからないのっ!?!?」

一気に捲し立てる。

その声は泣き出しそうだった。

振り切って部屋に戻ろうとしていた真弥だが、その声の真摯さに振り向かずにはいらなかった。

氣遣ってくれる気持ちは嬉しかった。

でも、そのために人を殺せと言われるのは辛い。

「ぼくはね、由希。たぶんよほどのことがなかったら、自分から剣は握らないと思う。そのために死んだとしても、ぼくには人は殺せない」

泣き出しそうに顔を歪め、震える由希には申し訳なかったが、これが真弥の本心だった。

もしそのときがくるとしたら、命懸けで護りたい相手ができたときだろう。

「人を殺せばそれは罪だよ。殺し合いは愚かなことだ。ぼくは意味のない殺し合いはしたくない」

どこまで伝わるか自信はない。

それでも言いたかった。

「ぼくが自分から剣をとって戦うことを選ぶときは、きっとだれかを護りたいと、この生命と引き換えでも護りたいと、そう決断した

ときだと思っ」

由希には言いにくいけれど、それは由希ではない。

由希のために人を殺そうとは思わない。

信念を曲げるとき、それはそれまでの価値観をかなぐり捨てても、護りたい女性ができたときだ。

「心配してくれているのは嬉しいけど、今のぼくにそれを求められても無理なんだよ。ごめんね？」

それだけを言いおいて、もう振り向きもせずに行ってしまう真弥に、由希は悔しそうに唇を引き結んだ。

真弥の口調はまるでそれは由希ではないのだと、由希のために信念を曲げるつもりはないのだと、そう聞こえた。

それが……悔しかった。

第2章 戻れない道(1) (前書き)

ブログ「蒼月華」で配信中の作品です。

第2章 戻れない道（1）

真弥と知り合った翌日、瑠璃は彼の元には行けなかった。

本当はなんの予定もなかったし、適当に理由を作れば時間は自由になる。

そう楽観していたのだが、昼過ぎになって突然、村長が訪ねてきたのである。

気分が悪いの一言で撃退できるわけもなく、瑠璃はその日は真弥に逢うのを諦めた。

本当は彼と逢って話すのは楽しかったから、絶対に行くつもりだったのだが。

だが、これもちょうどいい機会かもしれないと、瑠璃は上座に位置し跪いた村長を見つめつつ口火を切った。

「それで御用はなんなのかしら、村長？」

「もうすぐもしかしたら西の部落と戦になるやもしれません。その託宣に備えて巫女殿には潔斎をお願い致したいのです」

そう言われたとき、瑠璃の漆黒の瞳が鋭く煌めいた。

「いつ頃、突入するのか、どのくらいの規模なのか、そういったことをいつものように……」

言いかけた村長を瑠璃の鋭い声が遮る。

「今度はどこの国を滅ぼすつもり？」

「巫女殿？」

怪訝そうな村長に、瑠璃の背後で付き添っている由希も、ふしぎそうに女主人をみた。

今までの瑠璃とは別人のように、強い意志と考えをもって話しているようにみえる。

この急激な変化はいったいなんなのだろう？

「あなたは巫女の力を本当にわかっているのかしら、村長？」

わかっていないだろうと瑠璃は思う。

「あなたがどれほど上手い言い訳を使っても、その内容が言った言葉を裏切っていれば、わたしの託宣も意味を違えてしまうわ」

瑠璃が良い意味で託宣していても、騙されていれば意味が変わってしまう。

その意味を、それが招く結果を、この人は本当にわかっているのだろうか。

「あなたは人を殺すことの恐ろしさを、簡単に人を殺せる人の醜さを、本当に理解しているの？」

蒼白になりながらも、巫女によけいなことを吹き込んだのはおまえかと、村長が由希を睨み付ける。

由希が慌てて否定する前に瑠璃が彼女を庇った。

「本当に巫女の力を侮っているのね、村長。別に由希から聞かなくても、わたしにはわかるわ」

真弥に聞かなくても、いずれねじ曲げられた真実に気づいた。

それが巫女だ。

「あなたがこれまでにわたしを騙して得た託宣。それが歪められ積み重なったあなたの業。罪は報いを呼ぶわ。業は人の魂を疲弊させていくわ。教えてほしい？ あなたの最期を」

とんでもないとかぶりを振る村長に、瑠璃はやるせなく微笑む。

だれだって自分がいつ死ぬかなんて知りたくないものだ。

ましてやどんなふう死ぬかなんて、絶対に知りたくないだろう。

人はそれほどまでに脆く弱い。

それなのに何故、人は過ちを繰り返すのだろう。

「戦をして喜ぶのは、天から得た宿命に背く行い。戦を回避するよ

うになさい。そのかわりもし相手が攻め入ってきてても、わたしが護るわ」

「巫女殿」

「これ以上罪を重ねてはいけない。わたしにはわかるのよ。血なまぐさい現実を重ねてきた業が、いつか報いを呼ぶ。わたしはこの部落を護りたい。滅ぼしたくないのよ。わかってくれるわね？」

瑠璃の言葉を裏返せば、これ以上今までと同じことを繰り返せば、部落が滅ぶと言ったも同じだった。

さすがにふたりとも驚愕している。

滅びを避けたいという。

護りたいのだという。

ではこれから先、どういう理由があれ、戦はできないのか？

護るための戦なら、おそらく制止はかからないだろう。

これまでがそうだったように。

だが、託宣を求める意味が違っていて、それに気づかれたらまず無理だ。

巫女の託宣なくして政は決められない。

瑠璃が許さないかぎり、私腹を肥やすための戦は、禁じられたも

同然だった。

歴代の巫女は人形のように村長の言いなりで、知らず知らず振るうその力で、多大な加護を与えていた。

だが、この巫女は歴代の巫女とどこかが違う。

畏怖すべきほどの力。

絶対に外れない託宣。

その巫女が自分の意志で歩きだし、織る未来の託宣をだれよりも理解して行った場合。

この巫女は希代の巫女になると同時に、おそらく最も扱いにくい巫女となる。

傀儡にはできないだろう。

どれほど上手い嘘を並べても、めざましく力に目覚めた巫女には、それが嘘だとわかってしまう。

厄介なことになったと頭を悩ませながら、村長は村へと戻っていた。

第2章 戻れない道(2) (前書き)

ブログ「蒼月華」で配信中の作品です。

第2章 戻れない道(2)

いつもの私室に戻った瑠璃は、由希のふしぎそうな眼差しを受けて、もう沈みかけた夕陽をみながら、彼女に声を投げた。

「どうかしたの、由希？ そんなにジツとわたしをみて」

「いえ。ただ先ほどの瑠璃さまが、今までとは別人のようにみえて、すこし驚いていました。なにかあったのですか？」

「別になにもないわ。敢えて言うなら、無知はこの世で最も重い罪だとわかってしまった。それくらいかしらね」

瑠璃の言葉は曖昧で由希にはよくわからない。

でも、今までは着飾られていただけのきれいな小鳥。

籠の鳥だった意志を持たない人形そのままだった瑠璃が、自分で考え決断を下しはじめているということはわかった。

どういう理由にせよ、瑠璃が自分で前に進んでいくのなら、それは良い変化なのだろうと、由希は自分を納得させた。

巫女と付き合っていく上で、踏み込みすぎるのはよくないと、それまでの経験で知っていたので。

踏み込みすぎて、これ以上の友情を抱けば、おそらく由希は監視役としては、不適合と見なされ解雇される。

そうすれば違っただれかが、瑠璃のお傍付きに選ばれるだろう。

最悪、巫女の実態を知る由希は、人知れず消されるおそれだってある。

自分が望んだわけでもないのに、取り巻きは大勢いるが、本当の友達といえる相手はいない。

純粋な友情を向けてくれる人も。

自分ではどうしてなのかわからない。

幼なじみにして最愛の真弥に、昔、何度かそれは由希のせいだとそんな態度はいけないと言われたことがある。

でも、なにがダメなのか。

どうしてダメなのか。

由希にはわからなかったのだ。

だれひとり不平不満は言わない。

みんな由希の前では笑ってくれる。

それがそのときだけの付き合いだとしても。

それで何故いけないのか、何故、真弥の言うとおり友達ができないのか。

由希にはどうしても理解できなかった。

そんな由希にとって瑠璃は、初めて打算のない友情を向けてくれた相手だった。

できるかぎり力になりたい。

だから、深入りしすぎてはいけない。

境界線をこえて、それをもし悟られれば、もう瑠璃の役には立てないから。

瑠璃の前では素直になれる。

由希は気づいていなかったが、それは事実だった。

自分より立場が上だから、自分が気遣うべき相手だから。

だから、由希はいつものようなワガママは言わない。

瑠璃がどれほど孤独な境遇で生きるように強いられているか。

由希はだれよりも知っている。

だから、瑠璃の力になりたいと願う。

それが由希を優しい少女に変えていた。

それだけに瑠璃との繋がりの意味は大きい。

ふたりの友情がいずれ崩れ、跡形もなくなったとき、由希がすべてを滅ぼすほどの悲劇を招くと、この時点ではふたりとも知る葦もなかった。

「真弥っ。ここだよっ」

初めて逢ったあの日にふたりで過ごした湖で、真弥を待っていた瑠璃は、駆けてくる彼の姿を見つけて笑顔で手を振った。

男言葉にもだいぶ慣れてきていて、真弥とも普通に話せるようになってきていた。

まあ時折、異性と付き合うのに慣れていないせいで、妙な態度をとってしまうこともあるのだが。

それでも真弥はなにも言わない。

真弥の優しさに触れて、瑠璃は今とても幸せだった。

「ごめん。遅くなった。ちょっと鍛練が長引いてさ」

「嘘、だろ？」

やってきたとたんの一言に、小さく笑って指摘すれば、真弥がちよっと怒った顔になった。

どういうわけか、真弥は瑠璃に心配をかけることをものすごくき

らう。

だから、言いたくないことを当てられると、不機嫌になってしま
う一面があった。

「真弥は稽古なんてしないじゃない。なにかあったの？」

無邪気に見上げてくる瑠璃に、真弥はムスツとしたまま地面に座
り込んでしまった。

どうやらまだ怒っているらしい。

最初はそういう行動には抵抗があったし、あまりにも知らないこ
との多かった瑠璃だが、今ではちゅうちょなく行動に出られる。

ブスツとしたまま振り向かない真弥の隣に座ると、真弥がちょっ
とだけ視線を向けてきた。

言いたくないことを抱えているときの真弥の癖。

目を合わせれば嘘だとバレてしまうから顔はみない。

そのくせ瑠璃の方を気にしていて、何度となく盗み見る。

あまり隠し事をせず、おおらかな真弥は、瑠璃にはなんでも話し
てくれる。

だが、やはり個人的に言いたくないことはあるのか、彼は個人的
なことはあまり話してくれない。

つまり家族構成とか、友人関係とか、そういう些細なことだ。

瑠璃も素性は言っていないし、それどころか性別さえ偽っている状態だ。

だから、ちょっと寂しいなと思っていても、特に文句は言っていない。

ただ真弥をみていればわかることだが、よほど複雑な環境なのか。

時々ため息をついていることもある。

悩んでいるのなら、打ち明けてくれたらいいのにと、瑠璃は胸の内でも思う。

彼の役に立ちたいと思うのに、真弥は打ち明けてくれない。

それとも瑠璃自身が隠し事をしている状態では、打ち解け合っなんて無理なのだろうか。

「ねえ、どうしてそんな顔してるの？」

ふしぎそうな瑠璃に真弥は目を逸らす。

昨夜、由希の父親であり、父の親友だったおじさんに言われた言葉が脳裏をよぎる。

第2章 戻れない道(3) (前書き)

ブログ「蒼月華」で配信中の作品です。

第2章 戻れない道(3)

『もうすぐ18だね、真弥』

『ええ。10歳のときにおじさんが引き取ってくれて、もうすぐ8年ですね。前々から考えていたんですが』

『真弥の意見を聞く前にこちらの意見を聞いてくれないか？』

言いかけた言葉を遮られて眉を寄せる。

『由希の気持ちは知っているだろう？』

わかっていても面と向かって言われたことがなかったので返事に詰まった。

『もし真弥さえよければ、由希と一緒にやってくれないか？』

ここから先におじさんがなにを言いたいのかは、ほぼ把握していた。

由希が真弥以外はいやだと拒否していること。

真弥の気性では剣士はやっていけないこと。

だから、自分の後を継いでほしいと思っていること。

それらを言われてため息が出た。

気持ち嬉しい。

孤児の真弥がだれにも後ろ指を指されずに生きてこられたのは、すべてこの人のおかげだ。

それは感謝している。

できることなら、なんでもやって、その恩に報いたいとも思っている。

でも。

『すみません。それだけではできません』

『真弥』

『由希のことは好きです。妹として。幼なじみとして。でも、それだけです。すみません。ぼくの願いは独り立ちすることです。許してください。近いうちに準備が整い次第ここを出ていきます。お世話になりました』

一気に言っつて背を向けようとすると呼び止められた。

『これだけは答えてほしい。だれか想う人でもいるのかね？ 由希以外に大切なだれかがいるのかね？ そうでないなら』

『大切な人』

『わかった。そういうことなら、この話は終わりにしよう。由希の話は断ったからといって、別に出ていく必要はないよ？ わたしは

真弥も大事な息子だと思っているのだから』

『すみません』

それだけを言っただけで部屋に戻った。

想う人がいるのかと問われたとき、大切な人がいるのかと問われたとき、脳裏に浮かんだのは瑠璃だった。

瑠璃の無邪気な笑顔が脳裏に浮かんで戸惑った。

そうしたら「もういい」と諦めてくれたのだ。

由希にはすまないと思う。

でも、これが本心だから。

愛してもいないのに、由希を妻には迎えられない。

(でも……)

まだふしぎそうな顔をしている瑠璃を盗み見る。

いつもと同じ少年の装い。

おそらく髪の色は染め粉で変えているのだろう。

でなければ睫毛が黒なのに髪が亜麻色なのは変だ。

日に焼けたことなどないような、透き通るような白い肌。

どこからみても女の子だ。

見抜かれていることは、おそらく瑠璃は気づいていないだろう。

瑠璃はあまりに世間知らずだ。

偽ることは簡単。

気づいていないフリをすれば瑠璃はそれを信じる。

疑うことすら知らないように。

でも、このままの関係が続いても、結局お互いなにも言っていないのと変わらない。

瑠璃が素性を言えない理由は一応聞いたが。

あれは二度目に逢ったときの出来事だった。

まだぎこちない態度で会話して、そうして別れるとき、前に決意したように瑠璃を送っていくと言ったのだ。

そうしたら瑠璃は慌てて断ってきた。

日暮れが近いというのに、ひとりで帰ると言い張った。

ムツとして言い争いに近い状態になった。

そうしたら瑠璃は泣いてしまったのだ。

泣いて泣いて手がつけられなかった。

あときは本心から途方に暮れた。

泣いている瑠璃の方が途方に暮れているようで、なんだか彼女を苛めて責めた気がしたものだ。

そのときに瑠璃は初めて素性に関する口に出した。

いささか信じられない内容だったが。

『ごめんなさい。できないの』

『え？』

『家から出たことがないというのは本当よ……だよ。ぼくは外へは出られない』

『どづして？』

『そこにいることだけを必要とされているから。きれいに着飾った小鳥に意志はいらぬから。操りにくくなるから外へは出してもらえない』

泣きながらそう言われ、正直驚いた。

それではまるで囚われ人だ。

自分の意志を無視されて、自我さえ持てないよう注意され、些

細な自由もない。

どうして瑠璃がこれほど世間知らずなのか、疑うことさえ知らないほど無垢なのか、その理由を知った気がした。

知ることができないように細心の注意が払われた籠の鳥。

まさに瑠璃はそうだったのだ。

彼女の涙はとてもきれいで、嘘や言い逃れではないと、すぐにわかった。

泣き出してしまったのも、本当のことを言っているのも、瑠璃には嘘は言えないから。

ごまかすこともできないから。

そんなことすら彼女は知らない。

知ることがないように育てられたから。

無性に腹が立った。

その者たちは彼女の涙を知らないのだろうか？

どれほど傷つけているか、知ろうともしないのだろうか？

それともそんなことすら気遣ってもらえないのだろうか。

人形に意志はいらない？

あまりにも理不尽な気がした。

第2章 戻れない道(4) (前書き)

ブログ「蒼月華」で配信中の作品です。

第2章 戻れない道(4)

『そんなにいやなところなら、ぼくとくるっ。』

気がついたらそう言っていた。

瑠璃はびっくりして見上げてきて、涙も止まっていたけど。

とつさに出た言葉だったけど本心だった。

彼女がこんなふうに泣く姿はみたくない。

救い出したい。

なんの根拠も理由もなく、そう思い込んでいた。

『きみひとりくらいなら、なんとかなるよ。仕事をすこし増やせばいいんだし。そんなに泣くようなら、ぼくとくるっ。』

このとき、本当は断られるか、それとも受けてくれるのか、それすらも自信はなかった。

言うてはみたものの返事を恐れたほどである。

逢うのは2回目。

知り合いと言えるほど付き合ってもいない。

それで信じてもらえるとは思えなかったし。

でも、瑠璃の返答はまた予想外のものだった。

もう一度泣き出して謝ってきたのだ。

できない、と。

『どうして？ いやなんだろう？ いやじゃなければ、そんなに泣かないよね？ ぼくに遠慮してるのなら』

『……違う』

『え？』

『どんなにいやでも逃げられない。逃げてはいけないの』

本当は逃げたいと、その泣き顔が言っていた。

それなのに逃げられないというのだ。

瑠璃の言うことは、ふしぎなことだらけだった。

『自分を殺してもやり遂げなくてはならない義務がある。……心が
必要なのは、わたしの方かもしれない』

痛々しい眼をしてそう言われ、思わずカッとなった。

まるで悲しみも苦しみも感じる心がなければ、自分の不遇さには
気づかない。

その方がよかったのだと、そう言われたような気がして。

だから怒ろうとして、すぐにやめてしまった。

そう呟く瑠璃の瞳の方が傷ついていて虚ろだったから。

心があれば傷ついてしまう。

それはそうだろう。

自分の境遇を正しく理解できる知識と、それが招く現状の意味を知り考える心があれば、人は傷つく。

そんな扱いを受けて、傷つかない人間なんていない。

だから、本当に逃げられないのなら、心がいらなのは周囲の迷惑のせいではなく、自分のためだという。

その気持ちはよくわかった。

知らなければ焦がれない。悲しまない。

そういうことだ。

それでも瑠璃はここにいる。

その意味を忘れないでほしかった。

どんなに辛い境遇でも、心を捨てたらもう人とは言えないから。

ただ一言だけ知りたかった。

たったひとつの偽りのない彼女の本心を。

『そんな境遇ですべてわかっていて、そこにいるのは辛くないの、きみは？』

『辛い。すごく辛い』

心をすべて吐き出すようにそう言って、瑠璃はポロポロと泣き出した。

それまでの涙よりもっと大きな涙で。

悲しみは止まることを知らなくて、それでも逃げられない枷があるという少女。

どうすることもできなくて抱き締めていた。

最初は驚いたらしくて、腕の中で硬直したのを感じたけど、背中に腕を回し片手で髪を撫でると、すぐに声を殺して泣きはじめた。

たぶん今まで堪えてきた涙なのだろう。

あのときに簡単には連れ出せないと、軽い気持ちでは救ってやれないと思い知らされた。

だから、あれ以来、素性に関することは問わないようにしている。

問えば彼女を追い詰めるから。

でも、今のままではお互いガラス越しに相手を見ているようなものだ。

どちらも本当の自分をみせていない。

もし性別を偽っていることを知っていると打ち明けたらどうなるだろう。

瑠璃はすこしでも本当の自分をみせてくれるだろうか。

彼女がすべてを伏せたままでは、こちらもなにも言えない。

まして昨日のような問題を同性だと主張する瑠璃に話すのは変だ。

同性として友人として話すのならともかく、真弥が由希との縁談を断った原因は瑠璃なのだから。

その瑠璃に他人事のように話すのは、どう考えてもできない。

どうして断ったのかとか、断った理由は？ とか訊かれても、瑠璃が偽っているかぎり、なにも言えないからだ。

第2章 戻れない道(5) (前書き)

ブログ「蒼月華」で配信中の作品です。

第2章 戻れない道(5)

もしかして……ぼくは瑠璃が好きなんだろうか。

女の子を好きになったことはないから、自分でもよくわからないけど。

ため息ばかりが出る。

そうやって瑠璃のことを考えるほどため息をつくぼくを、瑠璃はどうやら変な奴と思っているらしいけど。

正直言って他のだれに、どう思われても平気だし、変人だと思いたければ思えばいいと思っているけど、瑠璃にそう思われるのだけは我慢できなかった。

かといって泣かせることもできないし。

こんなに優柔不断だったのだろうか？

素性についてはもう触れない。

すべてを覆し、それでも護り抜く覚悟はあるのかと問われても、今のぼくには返事はできないから。

もしその日がくるとしたら、世界中を敵に回しても、瑠璃を背負う覚悟ができたときだと思っ。

でも、性別を偽るのはやめてほしい。

それだけでも素直になつてくれたらぼくは……。

変、だな。

さつきから瑠璃に打ち明けてほしいとばかり思つてる。

最近イライラしていたのはそのせい？

やっぱりぼくは……。

でも、やっぱり瑠璃は鈍くて、こちらの切ない胸の内になど気づかずに、平然ときついことを言ってくれた。

「やっぱり変だよ、真弥。いったいなにがあつたの？ ひどく落ち込んでるよ？ もしかして戦でも起こるの？」

変で悪かつたねと、内心で腹を立てつつ真弥はかぶりを振つた。

「正直なところ、ぼくの予想では西の部落と戦が起きてても、ふしぎのない頃合いだと思つていたんだけど、どうも戦にはならないみたいだね。村長が和解の方向で動いているから」

「そうなんだ？ よかつた」

本当に心からそう思っているかのように、そのときの瑠璃の笑顔は、とても眩しかった。

眼を細めて見とれてから、ふと疑問が沸く。

どうしてすんなり受け入れる？

もしかして……戦が起きないことを知っていた？

「瑠璃は変なところで鋭いね。いつもはすごく鈍くて世間知らずなのに。どこでそういう情報を得るんだい？」

「えっと……その……」

言えないのか、瑠璃は口ごもってしまった。

嘘が苦手らしい瑠璃は、言えないことを問われると、大抵口ごもる。

どうやら瑠璃にとっては、知っていて当然の情報らしい。

しかし男ならまだわかるが、女の子がそういう情勢に明るいといるのは、どう考えても変だ。

瑠璃は嘘をつけるような娘じゃないから、余所者じゃないと言った初対面のときの言葉は本当なんだろう。

しかし、だとしたら瑠璃はいつたいどのだれなんだ？

大体どうしてそんな一部の者しか知らないようなことを知っている？

それも今回の問いに関しては、戦が起きるか起きないか。

詳しいことを知っているのは、ごく一握りの者だけだ。

真弥は由希の家にお世話になっているから知っているのだ。

「それと凄腕の剣士だから。」

間違いなく同じ部落の出身だが深窓の令嬢そのものの少女、瑠璃。

しかし由希の実家のせいで、部落に通じた真弥ですら、瑠璃らしき少女がいる家に心当たりがないときている。

（待てよ……）

たったひとり。

たしかにいるけれど、姿も名も知らない少女がいる。

そこにいなくてはいけない高貴な姫君。

だれも姿も名も知らない。

噂をすることすら禁じられた聖域の乙女。

瑠璃から聞いたすべての情報が符号する。

存在するだけでこの部落を護る圧倒的な力を持つ守り神。

（……まさか……）

青ざめて振り向けば、そこにはなにも知らないような、無邪気な瑠璃の顔があった。

絶世の美姫として名高い巫女だったとしても、不思議はないだろうその整った顔立ち。

美形と言つてなんら遜色はない。

おそらく少女の服装をして、それらしく振る舞えば、恐ろしいほど美しくなるだろう。

もしそうだとしたら、本当に軽い気持ちで近づくべき相手じゃない。

火傷じゃ済まなくなる。

ましてや辛いと泣く瑠璃を、その境遇から救いたいとすれば、生半可な覚悟ではダメだ。

問えばすべてが崩れてしまつかもしれない。

それにもしそうなら瑠璃の方から打ち明けてほしい。

こちらから指摘して暴露するのではなく、瑠璃から自分の秘密を打ち明けてほしい。

でなければ動けない。

もし真弥が望みのままに瑠璃を連れ出せば、間違いなく追われる身になる。

生涯、追われ続ける。

それでもいいと覚悟ができて、それは真弥ひとりの覚悟では意味がないのだ。

瑠璃にもすべてを捨てる覚悟をしてもらえないなら意味がない。

差し出された手を瑠璃が取れなかったのも無理はないのだと、今はそう思う。

自分の運命に巻き込みたくなかったのだろう。

でも、不思議だな。

巫女かもしれないとわかったのに、そう半分くらい確信しているのに、全然後悔していない。

近づいたことも、こうして一緒にいることも。

事実を知られるだけで殺されても不思議のない不敬罪なのに。

本気で瑠璃が好きだったんだ、ぼくは。

後がない断崖絶壁に立ってから気づくなんて、ぼくはそうとう鈍いのかな？

ガラス越しに触れ合うのではなく、きちんと手をとりたい。

その瞳でぼくをみてほしい。

言わないと瑠璃は気づかないかな？

だれかを好きになるって、こんなに切ない気分になるんだ？

「あのさ、瑠璃」

「なに？」

「大事な人には隠し事されたくないよね？」

「……」

「でも、一番大切なこと、隠されていると相手も言いたくても言えないよね？」

「……なんのこと？」

「さあ。なんのことかな。とりあえず今日はぼくは帰るよ。最近ちよつと忙しくて個人的な時間がないから」

立ち上がった真弥を見上げて瑠璃は問うてみた。

意味ありげなことばかり口にする真弥に。

「どろして忙しいの？」

「家を探してるんだよ。自分の家を。今のきみに言えるのはそれだけだよ、瑠璃」

それ以上は教えられないと言われたような気がして、瑠璃が傷ついたように真弥を見上げた。

「言っておくけどぼくはきみのことは、信じていないわけでもないし、きらっているわけでもないからね？ その辺は誤解しないでほしいな」

笑ってそう言って言いたいことだけ言つと、真弥はさっさと帰ってしまった。

その姿が見えなくなってから、瑠璃は深いため息を吐き出す。

第2章 戻れない道(6) (前書き)

ブログ「蒼月華」で配信中の作品です。

第2章 戻れない道(6)

「もしかして気づいているのかしら、真弥は？」

二度目に逢ったとき、彼の目の前で泣いてしまって、真弥は抱いて慰めてくれた。

そんなふうに接してくれた者はいなかったから最初は戸惑ったけれど。

すぐにその腕の暖かさとぬくもりに涙は止まらなくなった。

あのときは直接抱いて触れながらも、瑠璃が少女だと気づかなかった真弥に呆れていたけれど。

もしかして……気づいているのに知らないフリをしていた？

瑠璃が知られたくないと思っていることを知っていた？

そういえば初対面するときも、はしゃぎすぎて地を出してしまったことがあった。

あのときは言葉遣いを取り繕うことも忘れていた。

真弥はたしかに落ちこぼれ剣士と揶揄されているが、その実力は最高峰。

そのことは後になってから知った。

初対面のときに真弥が驚いていたのは、瑠璃が気配を感じさせずに近づいたからだと言っていたから、おそらく気配を読み取る能力にも長けているのだろう。

つまり鈍感なのではなく、真弥はとても敏感な青年であることを意味している。

たしかに真弥はおおらかで楽天的、おまけに鷹揚で人柄は温厚。

そういうふうには彼を見れば、鈍感でも不思議はない気がするけれど、本当の彼はだれよりも闘うことに長けた剣士。

天才とまで呼ばれるほどの。

その真弥が瑠璃でいどの変装を見破れないはずがないのだ。

おそらく真弥は気づいている。

瑠璃が少女だと。

知っていて知らないフリをしていてくれた。

瑠璃が知られたくないと思っていることを知っていたから。

真弥がなにも打ち明けなかったのは、瑠璃が偽っていることを見抜いていたから。

言わせなかったのは瑠璃の方だ。

彼に指摘されて初めて気づいた。

家を探していると言った。自分の家を。

それはどういう意味だろうか？

両親はいないのだろうか？

それとも両親の元から独立するのだろうか？

どうすればいいのだろう。

真弥にすべてがバレているなら、このまま隠し通して付き合えるとは思えない。

だから、真弥は気づけるように指摘してくれたのだろう。

でも、答えが出ない。

「真弥……」

名をささやくと涙が出た。

その意味には気づけなかったけれど。

「泣いていらしたんですか？」

神殿の私室に戻るなり、由希がそう驚いた声を投げてきた。

かつらを取ると長い黒髪がバサリと落ちる。

そうして微笑んでみせた。

「大したことではないの。風で眼になにか入ったらしくて、痛くて泣いてしまったのよ。どんなに泣いても痛みが取れなくて困ったわ」

肩を竦める瑠璃に由希がホッと安堵した顔になる。

嘘をつくのは心苦しかったけれど、由希に本当のことは言えない。

真弥のことを言ったとたん彼がどんな目に遭うか。

「泣いているのは由希の方でしょう？ 朝から元気がないわ。昨日まではいつも通りだったのに。なにかあったの？」

衣服を着替える瑠璃の手伝いをしてくれる由希にそう言えば、すこし強ばったようだった。

純白の綾織りに着替えてから振り返る。

「本当にどうかしたの、由希？」

見詰めてみれば由希は泣き出しそうな顔をしている。

勝ち気な少女らしくない表情に瑠璃は本気で驚いた。

家柄のせいもあるだろうが、由希はそういう顔はしない少女だった。

「いったいなにがあったの？ 教えてちょうだい。由希。心配じゃない」

「父さんが……あたしの気持ちを考えてくれて大好きな人に、その……結婚を申し込んでくれたんです」

「あら。そうなの？ そうよね。由希だってもう14だもの。婚約の話が出て当然なのよね。むしろ遅いくらいだわ。わたしは例外だし」

普通の少女は12になるまでには、大抵嫁ぎ先を決めると聞いている。

実際に結婚するのはもう数年後だが、婚約だけは早いのだ。

12にもなれば大抵の少女は花嫁になる資格を持てるから、その時期に決めるのが理想的とされていた。

由希の家柄を思えば、この話は遅いくらいだった。

でも、いつも身近にいる由希に大好きな人がいるとは思わなかった。

もしかして断られたのだろうか。

受けてもらえたなら、こんなに落ち込まないだろうし。

「……もしかして断られたの？」

おそろおそろ言えば、由希は泣き出しそつに顔を歪めてしまった。
どつちやらその通りらしい。

困った。

そついつ問題には慣れていないから、どつ慰めたらいいのかわか
らない。

第2章 戻れない道（7）

「父さんが言ったときに正面から断ってきたって。それだけではできないって」

「その人はだれか想う人でもいたの？ 断る理由は言ってくれたの？」

「言ってもいいのかわるか迷いながらもそう言えば、由希はいつそう落ち込んだ顔になってしまった。」

「どうやら想い人には他に心を寄せている女性がいたらしい。」

「勿体ない真似をするものだ。」

「由希の家は村長ですら敵わないほどの大富豪だというのに。」

「由希と一緒になれば、その後継にだってなれる。」

「それを断るといふことは、よほどその相手のことが好きなのだろう。」

「しかしそんなふうには断られてしまった由希を、いったいどう慰めればいいのかしら？」

「困ったことにさっぱりわからない。」

「今日はもう帰る？ そんな気分ならひとりでした方が楽なんじゃないの？」

「瑠璃さま……」

「わたしの前にいたら悲しい気分も出せないものね。遠慮しないでいいのよ？」

「ありがとうございます」

一言そう言って深々と頭を下げると由希はしょんぼりと出て行った。

その背中が奇妙なほど小さく見えて驚いた。

気丈な由希があんなふうになりたくないなんて、恋とはなんとも不思議なものである。

「恋……」

不意に浮かんだ言葉に胸が震える。

ついで真弥の笑顔が浮かんで、頬が燃えるように熱くなった。

「いやだ。わたしどうしたのかしら……」

うろつろと歩き回る瑠璃を見て、神殿に勤めている者たちが首を傾げていたが、瑠璃は気づくこともしなかった。

昨夜の話し合いの後から、真弥は言った通り家を探しはじめた。

ただしその基準で迷っている。

昨夜はとりあえず早く出ていかないかと思っていたから、自分ひとりが住めるなら、どこでもいいと思っていた。

少なくともさっき瑠璃に逢うまでは、そう思っていたのはたしかである。

だが、今は迷っている。

瑠璃を手に入れることができれば、おそらくここにはいられない。

瑠璃の姿や名を知っている者が少数とはいえいる以上、事が露見すればこの部落にはいられないのだから。

一時的という基準で探すべきか、それとも瑠璃のことは諦めて永住できる家を探すべきか。

迷いながらも人伝に空き家を探して回ったが、それが逆に噂を呼んだようだった。

養い子という立場にあっても、実子同然の扱いを受け、ほとんどのに不自由な生活を送っていた真弥が、突然、家を探しはじめたからだ。

村で騒ぎになるほど噂になるまで、ほとんど時間はかからなかった。

半刻ほどが過ぎた頃には、真弥のところ慌てたように勇人がやってきていた。

「ちよつと待てよ、真弥っ」

息せき切って駆けつけてきた勇人に、驚いたように真弥が振り向いた。

「なにを慌てているんだい、勇人？」

「これが慌てずにいられるかつ。いったいなにがあつたんだ？ 空き家を探してるらしいじゃないかつ」

「ああ」

そのことかと真弥が苦い気分で呟いた。

噂になるのが早すぎると、苦い気分になっていたのだ。

噂になるだろうとは覚悟していたが、行動を起こしてまだ半刻しか経っていないのに、これはないだろうと思う。

たしかに真弥はなにかと噂の種になる身ではあるのだが。

実力では最高峰の剣士でありながら、絶対に人を殺せず動物さえ傷つけられない落ちこぼれ剣士と揶揄されていること。

また真弥自身はあまり意識しないが、優しげなその美貌も注目の的となる。

人柄だって魅力的なものだし、実際、真弥は実によくモテた。

これでだれも仕掛けてこないのは、真弥の傍に常に由希が控えていたからである。

売約済みだと思っていただけなのだ。

そのことまでは真弥は知らないのだが。

第2章 戻れない道（8）

いつもは優しい真弥の瞳が鋭くなり、その怒気を垣間見せた。

信じ込んでいた勇人は啞然としている。

「由希ちゃんと付き合っていたんじゃないのか？ この辺の奴らはみんなそう思ってるぞ？」

「なんだい？ その根拠のない確信は……」

呆れたような真弥の様子は、明らかに心外だと言っている。

「どうなってんだよ……」

「ぼくが訊きたいよ。なんなんだい、その噂？ ぼくは由希と付き合った覚えなんて一度もないからね」

呆然とした勇人から事と次第を打ち明けられ、さすがの真弥も本気で呆れてしまった。

なんでもかんでも好きに解釈してくれと、適当に受け流していると、とんでもない誤解が真実としてまかり通るものらしい。

だから、おじさんがあんなことを言ってきたんだろうか？

「そういう事情がないなら、なんだって今頃になって家を出るんだ？ 普通に自活するにしても、冬を目前にした今頃にそういう行動に出るのは変だろう？」

秋の紅葉も深まり季節はすぐに白くなるだろう。

この辺の秋は短いのだ。

だから、普通になんの問題もなく、両親の元から自立するように独立するなら、別段今の季節を選ぶ必要はない。

むしろみんなこんな時期の引っ越しは避けるだろう。

大体、真弥の境遇を思うなら、新しい家を見つけて引っ越した場合、間違いなく現在より環境的に劣るはずで、感じる寒さも比較にならないだろう。

勇人が疑問を感じるのも無理はなかった。

普通なら適当にあしらい答えないところだが、相手が勇人だったし、周囲にはほとんど人がいないということもあって、真弥は打ち明けることにした。

噂をきちんと否定したかったのだ。

瑠璃は真弥を捜してこの辺りをうろつくこともあるから、なにも知らない彼女に、そういう噂が耳に入るのを恐れるのである。

自覚していないが最愛の人を優先しているため、由希には残酷な仕打ちなのだが、真弥は気づいていなかった。

たったひとりと思い詰める人が現れてしまったら、だれだってその他の者には残酷になれるものである。

最優先の対象が決まっているから。

このときの真弥はそういう感情がなにを招くか、まだ自覚してはいなかった。

周囲が恐れるほどの実力を持つ真弥が、心にしっかり灯した気持ち。

それは状況によっては恐ろしい刃と化す。

その決断を下せる力を真弥はすでに得ていた。

まだ気づいていなかったけれど。

「勇人だから打ち明けるけど、実はおじさんから正式に話が出てね」

「誤解じゃないじゃないか」

「誤解だってつ。本当に付き合っていないし、ぼくは由希のことは妹のようにしか思っていないよ。おじさんからは由希と一緒にあって後を継いでほしいって言われたけど、ぼくは断ったからね」

「信じられねえ。勿体ない真似するなあ。おれならそんな絶好の機会、絶対に見逃さないぞ」

眼を剥いて驚く勇人に真弥は呆れている。

「それって金持ちなら、相手はだれでもいいわけ、勇人は？」

「うん。時と場合によるだろうけど、普通は断りにくい誘惑じゃないか？ それともそんな好条件の縁談を断わったってことは、他に好きな女でもいるのか？」

半信半疑といった感じの問いだっただ、言われた瞬間、真弥が微かに動揺した。

気持ちを自覚したばかりのせいでごまかせなかったのだ。

珍しく狼狽える真弥を見て、勇人はもつと驚愕する。

「おいおい。いったいいつの間に？ 相手はだれだよ、真弥？ 由希ちゃん以外の女の子と付き合ってる素振りはなかったけど、いつの間に引っかけたんだ、おまえ？」

「怒るよ、勇人。そういう言い方をしたら」

まるで遊び人みたいに言われ、真弥がムツとしている。

「悪い。悪い。で、ほんとにだれなんだ？」

「……悪いけどそれは言いたくない」

片手を口許に当てて顔を背けて、そう答える真弥に勇人は追及を諦めた。

これは言わないだろうと判断して。

なにか言えない事情があるのかもしれない。

それに真弥の方は違ったとしても、由希の方は間違いなく真弥を想っている。

相手の名が耳に入ったら、なにをするかわからない。

そういう意味でも言えないだろうと思ったから。

ただその場合、真弥がその相手と添い遂げようと思ったなら、もしかしたらこの部落を出ていくかもしれないと、ふとそんな予感がした。

「もしかして由希ちゃんとの縁談を断わったから家を探してるわけか？」

「まあね。ぼくもそこまで厚顔無恥じゃないつもりだから。縁談を断っておきながら、まだお世話になれると思う？ おじさんはそんな必要はないと言ってくれたけど、由希のためにも離れるべきだと思うんだ。ぼくが応えてやれない以上」

「そっか」

真弥らしいなと思う。

由希は決して万人に好かれる少女じゃない。

由希のことを本心から気遣うのは真弥くらいだ。

その真弥も幼なじみとしての気持ちしか感じられなかったみたいだが。

案外、本来なら由希は真弥にとって、一番苦手な少女ではないだろうか？

幼なじみとして育っていなかったら、近づくこともなかったかもしれない。

「由希ちゃんはけっこうワガママだし、独占欲だって強いしな。おまえが断っても、すぐには諦められないかもしれないな。気持ちの切り替えだってできるとは思えない。おまえさ。その相手と結ばれたらどうするんだ？」

この問いは真弥にはとても意味が重かった。

まだ仮定だが真弥が想いを寄せる相手はよりによって巫女だ。

普通なら許されない想いである。

だから、軽い気持ちでは答えられなかった。

「……そのときはここを出ていくよ、ぼくは」

「由希ちゃんのせいかな？」

「いや。別に由希のせいじゃない。由希の問題がなくても、そのときは出ていくよ、ぼくは」

「真弥？」

思い詰めたような目の色が気になって、勇人が気遣うように名を呼んだ。

「とりあえず由希には伏せておいてもらえると助かるよ。知ったらなにをやりだすかわからないし」

「おまえのためにならないことはしないって。でも、なにも出ていなくても……」

「勇人。もしそのときがきたら、勇人にもぼくの気持ちが変わるよ。どうして出ていくのか。出ていかなければならないのかが」

「……」

なにひとつ返事を返せずに、勇人は遠ざかる真弥の背中を見ていた。

真弥がなにか超えてはならない境界線を超えたような、そんないやな予感がしていた。

「もしかしてあいつ……ものすごく厄介な相手に惚れたんじゃないだろうな？」

結ばれたそのときは出ていくしかないのだと、真弥の口調はそう聞こえた。

まるで追われるように。

いやな予感だった。

とても。

第3章 枯れ草の寝台（1）

あれから真弥には逢っていない。

真弥が忙しいと言っていたのもあるが、別れ際に彼が言っていたことが気になって、逢う勇氣を持てなかったのである。

『大事な人には隠し事されたくないよね？』

瑠璃の瞳を覗き込んできて、そう言った真弥。

『でも、大事なこと隠されてると相手も言いたくても言えないよね？』

あの言葉の意味を何度も考えてみた。

曖昧なあの言葉。

でも、瞳はまっすぐに瑠璃を捉えていた。

彼がなにを言いたかったのか、必死になって考えた。

瑠璃は普通に人付き合いをしたことがない。

そのことがこのときは本当に悔やまれた。

瑠璃には判断する基準がないのだから。

そうして同じ日にお傍付きの由希から、思いがけない話を聞いて、瑠璃は自分の真弥への気持ちがあるのか、そのことを気にしはじめた。

そうなるとしても真弥には逢えなかったのである。

『恋』

男が女を女が男を恋つる気持ち。

知識に乏しい瑠璃には、そんなふうにはしか解釈できない。

人を愛しく思つ心。

それは部落を護りたいと愛する心とは意味が違うのだろうか？

だいたい巫女にとって恋や愛は禁忌だ。

異性との接触が禁じられていることでもわかるように、だれかと結ばれることなど認められていない。

それはすべてを裏切る行為だ。

巫女が夫を迎えれば死罪。

それが揺るぎない掟。

「……………」

名を呟きそうになって唇を噛む。

今度、真弥に逢うときは答えを出してから。

ずっとそう思っていた。

思っと思いつづけて1週間が過ぎている。

こんなに長く逢わずにいるのは出逢ってから初めてだった。

振り向いたら隣で微笑んでくれているような気がするのに……振り向いても、そこに真弥はいない。

そのことが泣きたいほど悲しい。

切なくて……。

「わたしは掟に振り回されない。自分に素直に生きるわ。わたしだつて……生きている。心を持っているのよっ」

きつい口調で呟いて、瑠璃は久しぶりにお忍びに出るため、慌てて準備を始めていた。

「やれやれ」

いつも瑠璃と逢う湖の畔。

待っていても彼女はこないのに、じっと待ち続けている。

あの日から。

言わない方がよかったのだろうか。

問えば逢えなくなるかもしれない。

そんな予感があった。

あつたのに口に出してしまった。

そうして……逢えない。

もう1週間もこうして待っているのに。

ただ彼女がきてくれるのを。

家を探すのも上手くいっていない。

由希が気づいて邪魔して回っているからだ。

空き家を見つけても、住むところまでこぎつけない。

必ず由希に邪魔をされる。

おかげで由希の家から出られない状態が続いていた。

瑠璃に逢えれば、それだけで気分は晴れたかもしれない。

でも、そんなときに限って疎遠になっていて、なにをやっても上手くない。

半分くらいは八つ当たりだと気づいていても、解放してくれない由希とは、最近は口もきいていない。

彼女から話しかけられても避けている。

おじさんからは「すまない」と謝罪されたが。

由希を説得しているが上手くないかないと。

せめて妻を迎えるまで、ここにいてくれないかとまで言われたが、それは由希の思いつツボのような気がしたし、それでは権力に屈するようではないやだった。

結局は真弥よりも由希に力があるのだ。

だから、なにをやっても上手くないかない。

本当は……こんなときだから、いつもよりずっと瑠璃に逢いたい。

逢って微笑んでもらえたら、それだけで心が癒されるから。

彼女の微笑みだけで心の支えになるから。

どうしてあんなことを言ってしまったんだろう。

素性に触れられるのを彼女はあんなに警戒していたのに。

逢いたいのには逢えない。

両手で頭を抱え込んで目を閉じる。

それだけで瞼の裏に瑠璃の笑顔が浮かぶような気がした。

でも、思い描く瑠璃は何故か泣き顔なのだ。

それがやるせなくて辛かった。

「真弥」

ハツとして振り向いた。

空耳？

瑠璃の声が聞こえた気がしたのに。

気配はない。

どこにいるのかもわからないくらいの静寂。

でも、瑠璃は初対面のときに気配を感じさせなかった。

意図的になら気配は殺せるかもしれない。

彼女が本当に巫女ならそのくらいはお手の物だろう。

「瑠璃？ いたら出てきてほしいよ。さっきの音がぼくの空耳でな

ければ。きみに……逢いたいつ」

立ち上がって振り向いても気配はない。

声もしない。

やっぱり空耳かと肩を落としかけて、もう一度声が聞こえた。

「今……行くから、すこしだけ待っていて」

声が震えているような気がして、ちよっと戸惑った。

逢えるだけで嬉しかったから、声が聞こえたら、空耳じゃなかったとホツとしたけど、この状況はなんだろう？

衣擦れの音が聞こえる。

もしかして。

疑って視線を流していると大樹の影から、ひとりの少女が姿を見せた。

純白の絹の綾織りを身に付けて。

腰に届くほどに長い黒髪。

純白の衣服がよく映える。

想像していた通り瑠璃は黒髪だった。

あんなに綺麗な黒髪は見たことがない。

それにあの衣装からみて間違いなく彼女が巫女だ。

由希でさえ、あれほど豪華な衣装は持っていないのだから。

言葉は出なかった。

これが1週間悩んで出した彼女の答えだと知って。

「瑠璃？」

名を呼ぶと合わせた両手が小刻みに震えた。

「怒ってる？ あなたを騙していたこと」

「どうして？ 怒っていたらあんなことは言わないよ。それにきみは自分から本当の自分を見せてくれた。だから……もういいんだよ、瑠璃」

本心だった。

その立場を思えば決して簡単な決意ではなかっただろう。

それはこの1週間という時間が示している。

瑠璃は悩んで悩んで、そうして答えを出したのだ。

裏切りじゃない。

彼女の真心。

第3章 枯れ草の寝台(2)

言わなくても言われなくても、もうお互いの気持ちはわかっているような気がしていた。

錯覚のような一瞬でも、それは紛れもない真実だった。

「憶えているかな？ 1番大切なことを隠されていると、相手も言いたいことが言えなくなるって言ったばかりの言葉？」

コクリと頷く彼女に微笑んだ。

今なら告げられる。

そう思ったから。

「きみが女の子だって出逢ったときから知っていたよ」

「え？」

驚いた顔をする瑠璃に笑ってみせる。

「本気でぼくを騙せると思ってた？」

苦笑した問いには否定の動作が返ってきた。

薄々わかっていた。

彼女の方もそんな態度だった。

「ただどうして偽るのか、事情まではわからなかったし、あのときの瑠璃はとても真剣に見えたから、あまり悪い解釈はしていなかったんだ。だから、付き合っただよ？」

「知らなかった……」

本当に世間知らずな瑠璃。驚いた顔でそう言って。

でも、そんなところが可愛いと思うし、好きになった理由でもあるけど。

瑠璃の世間知らずは由希とは意味が違うから。

彼女はいい意味で染まってない。

「疑問は……あつたよ。瑠璃はあまりにも不自然だったから。でも、すこし付き合えばそれが演技かどうか、瑠璃の素顔なんてすぐわかる。ぼくも伊達に剣士は名乗っていないからね。人の本質を見誤るほど愚かではないつもりだよ」

「そうね。あなたはとても聡明な人だね。真弥。聡明すぎて真理がわかるから、あなたは罪を犯せないのよ。そのことでもう自分を責めないでほしいわ。あなたは間違っていないから」

優しい言葉に頷いた。

これが巫女の託宣というものなのだろうか。

「自惚れかもしれないけど、ぼくにはきみがよくわかったし、きみ

ならばくをわかってくれると信じてる」

また頷かれ、ちよつと不安になる。

こちらの言葉だけを伝えて、彼女の気持ちを聞いていない。

すべて伝えれば言うてくれるだろうか。

建前も演技もすべて捨てた彼女の本心を。

「だから、かな。きみから事情を聞いて、もう素性には触れないでいようと決めたのに、きみが理解できてくるほど、演技を重ねてしまかして付き合っていることが苦痛になってきたんだ」

「真弥」

「きみがなにも言うてくれないから、ぼくも言えない。これはぼくの本心だよ。ずっと悩んでいた。あの日それを告げる勇気が出たのは……きみがだれなのか、やっと気づいたからだよ」

ギクリとしたのか、青ざめる瑠璃に一定の距離を保ったまま微笑みかける。

今近づけば逃げられるような気がした。

「きみは……巫女だよね、瑠璃？」

何度か視線を逸らしてためらうような素振りを見せた後で、瑠璃はゆっくりと頷いた。

人が聞いたら羨むだろう。

美貌で知られる巫女を一目見たい。

これは村の男たちの潜在的な願望だからだ。

噂をすることも許されなくて、おおっぴらにはできないが、だれもがそう願っている。

バレたら八つ裂きかな？ と、軽く肩を竦めた。

たしかに……綺麗だ、瑠璃は。

こんなに綺麗な少女をぼくは見たことがない。

姿だけじゃない。

内側から滲み出る「なにか」が彼女を内面から輝かせている。

でも、ここにいるのは巫女じゃなくて、ひとりの女の子、瑠璃だ。

素直にそう思える。

「素性に気づけばきみが偽るのが何故なのか、あのときぼくの申し出を断ったのは何故なのか、ぼくにもやっとわかったよ」

「……いめんなさい」

「どごして謝るの？」

問いかけると瑠璃は驚いた顔をした。

「たしかにびっくりしたし、その現実が秘める意味に気づいたときは、あのときのぼくの方がうかつだったんだなってわかるよ。」

中途半端な好意なんて、きみには迷惑なだけだね。きみの立場を思えば、中途半端な決意では傍にはいられない」

泣き出しそうな瑠璃。 愛しい瑠璃。

どうか気持ちを告げるまで逃げないでほしい。

でなければ瑠璃はきつと逃げ出して二度と逢ってくれない。

自分の運命に巻き込むことを、1番恐れているのは他ならぬ瑠璃だ。

だから、聞いてほしい。

偽りのない、この心を。

第3章 枯れ草の寝台(3)

「だけど、ぼくは言ったよね？ 隠し事はされたくないって。これがどういう意味になるか、わかるかい、瑠璃？」

「わたし……わたし……」

両手で口許を覆って泣き出した瑠璃にもう一度微笑みかけた。

「きみのためならばくは人を殺せるよ？」

「真弥……」

驚きが、その涙で潤んだ黒い瞳に浮かんでいく。

「きみを護るためならばくは人を殺せる。この決意は嘘じゃない。そついう真似はきみはクライだろうけど、ぼくの望みはそつでもしないと果たせない。それでもいやじゃなかったら……この手を取ってくれないかな？」

一定の距離を保つたまま手を差し出した。

まだだれかを殺したことはない手。

でも、手が触れ合えば、たぶん、血塗られる手。

その手を瑠璃が取ってくれるかどうか、それが知りたくて祈るよつに彼女を見ていた。

汚れを知らない乙女。

汚すのはぼくかもしれない。

でも、護るから。

命懸けで護って愛するから、だから、どうか……。

差し出された手が微かに震えている。

隠そうとしても痛いほどの彼の緊張が伝わってくる。

あれほどだれかを傷つけることを厭っていた真弥が、動物さえ傷つけられないと笑っていた真弥が、瑠璃のためなら人を殺せるとまです言ってくれた。

罪かもしれない。

どんな理由があれ人を殺せば、それは罪だと言ったのは瑠璃だ。

なのに彼の言葉が泣きたいほど嬉しい。

破滅しか待っていないかもしれない。

でも……。

時がすべてを止めるような静寂の中で、ゆっくり近づいてきた瑠璃の手が、差し出されていた真弥の手と重なった。

一瞬の硬直。

そうして真弥の顔に今まで見たこともないような、嬉しそうな極上の笑顔が浮かんだ。

瞬きを繰り返して確かめている瑠璃を掴んだ手を引っ張って抱き締める。

それだけでただ……愛しかった。

「好きだよ、瑠璃。きみを……愛してる」

吐息のような告白。

腕の中で何度も頷く愛しい少女。

泣いているのかもしれない。

抱き締めた肩は震えていたから。

第3章 枯れ草の寝台(4)

真弥がそうであるように、きっと瑠璃もそうだろう。

なんとなくそうわかる。

だが、だからこそ真弥の存在は、真弥との関係は瑠璃の生命線にもなる。

知られたら、それが最悪の密告だったりしたら、（例えば夫を迎えたと嘘でも言われたりしたら）瑠璃の生命はない。

（どうしよう？ 由希のことを瑠璃に言えば、瑠璃が余計な罪悪感を抱きそうだから言えない。

でも、なにも言わなかったら、不味くないだろうか？ 彼女がうっかりぼくの名前を出したりしたら、一体どんなことになるか）

それにあまり変な勘繰りはされたくないし。

だいいち隠し事はされたくないと言って、瑠璃にこれほど重い真実を打ち明けさせたのは真弥だ。

真弥も真実を返すべきだろう。

ただその方法が問題だ。

瑠璃が自分を責めないように話を運ばないといけないし、由希には絶対に気を許さないように注意しないとイケない。

でも、そういう人を疑うような行為を、瑠璃が受け入れてくれるだろうか。

「真弥？ どうしたの？ もう着替えは終わったけれど」

言われて振り向けば、いつもの格好をした瑠璃がいた。

そういう場合ではないし、自分で言ったことだというのに、ちょっと勿体ないな、なんてため息が出てしまう。

そういうことを感じる程度には、真弥も普通の男だったということだろう。

実際、自分でも絶対に淡白だと思い込んでいたのだが、どうやら違うらしい。

「なに？ その顔」

「いや。初めて見た女の子らしい格好が、あまりに似合っていたから、ちよっと勿体ないなと思って」

頭を搔いてそう言えば、瑠璃は頬を染めて顔を背けてしまった。

可愛いなと笑みが零れる。

「ほんと。瑠璃ってすごく可愛くて綺麗なのに、今まで見られなかったわけだから、結構、損をしてきてるよね、ぼくも」

「もうやめて、真弥。恥ずかしいじゃない」

瑠璃はもう真っ赤だ。

もうすこし苛めてみたいなんて思ったけど、やめておいた。

どうして好きな相手は困らせたいのかな？

自分で自分がよくわからない。

でも、もし違う男に似たような科白を言われて、瑠璃が同じ反応を見せたら…… ちょっと想像したらなんか…… ムカツときた。

なんだか自分で自分に振り回されている気がする。

ちょっと落ち着かないと。

ぼくがこんな調子だと、ぼく以上に免疫のない瑠璃を戸惑わせてしまうから。

そのくせ困らせてみたいんだから、変だよ、ぼくも。

「真弥？」

下から窺うように見上げられ、ちょっと笑ってみせた。

ごまかし笑いだっただが、瑠璃はホツとしたようだった。

「今日はちょっと時間あるかな？ 大事な話があるんだ。きみに」

「夕刻くらいまでなら。巫女のお仕事は大抵夜にあるから昼間は暇なのよ」

「ふうん。巫女の仕事ってなにをするのかな？」

いつも通り湖の畔で隣り合わせで腰掛けた。

違っていることがあるとしたら、真弥が瑠璃の肩を抱き寄せていて、瑠璃が肩に凭れかかっていることぐらいだろうか。

甘えられてなんだか嬉しくなる。

「色々あるけれど基本的には託宣のための潔斎とか、村長とか、部落の顔役との打ち合わせとか。そんな感じね。巫女のお仕事で1番重要視されるのが、託宣のための潔斎と託宣を行うときの儀式よ」

「へえ」

全然知らなかった。

瑠璃を見てみると、そういうややこしい手順はいらないような気がするのに。

「でも、だれもわかってないのよ」

「え？」

「歴代の巫女がどうだったかは知らないわ。でも、わたし……本当は託宣をするのに、そういう手順っていらなのよ」

言われても納得しかなかった。

真弥にはそういう特殊な能力はないが、なんとなく瑠璃を見ると、不思議な感じがするから変だと思ったのだ。

さっき力を使うのに儀式がいると言われて。

「例えば村長から戦についての託宣を求められたとすることでしよう？
そうするとわたしには意見を求められたときに、すでに答えは出ているの。託宣はすでに終わっているのよ」

「それなのに儀式をするの？」

「大人ってどういうわけか、きちんと儀式をしないと信じないの。
バカよね。儀式をしてもしなくても、意味も結果も変わらないのに」

「じゃあ西の部落との戦を止めたのは、もしかして瑠璃だった？」

驚いた声で問いかけると瑠璃は笑った。

第3章 枯れ草の寝台(5)

それで答えがわかった。

だったら戦が起きなかったことを知っていても不思議はない。

むしろ当然だ。

止めたのは他ならぬ瑠璃なのだから。

あれはもしかしたら自分の託宣が受け入れられたかどうか、確認しただけなのかもしれない。

だから、受け入れられていると知って、あれほど嬉しそうに笑ったんだ。

「村長は一体どんなふうにきみに託宣を求めたんだい？」

「いつもと同じよ。西の部落が攻めてくるかもしれないから、その規模とか、そういったことを託宣してほしいと」

「言いたくないけど言い訳だね。あれはもし起きていたら、間違いなく悪いのはこちらだったよ」

だって仕掛ける側なのだから。

というより用意周到にすでに準備はされていた。

巫女が許せば即座に戦が始まっただろう。

そのために向こうを混乱させて、わざと国主を狙ったのだ。

向こうの戦意を高めるために。

そうすれば向こうから攻めてくる。

こちらがやったという証拠さえ残さなかったら、ただその疑いがあるというだけで、攻めてきた西の部落が悪いと建前が揃うから。

現在の村長はそういう意味では知恵に優れていたし、そういうことにかけて余念がなかった。

私腹を肥やすため、領土を増やすための戦を自分から起こしていた。

瑠璃にはそれがどう聞こえ、どう受け取ったのだろうか？

「わたしにも視えていたわ。村長の手の者が、西の部落の国主を狙ったのでしょうか？」

「すごいね。一言言われただけで、そこまでわかるんだ、きみは？」

驚いてそう言えば瑠璃はやるせない笑顔をみせた。

あんまり特別だと言われたくないのかもしれないな。

普通に扱ってほしいのかもしれない。

気をつけよう。

今まで知らなかったことだから、つい素直に受け答えしてしまっ
た。

愛しい女性は傷つけない。

「真弥にはこの森はどう見えているの？」

「どつって……すごく綺麗な豊かな森だと思うけど？ だから、気
に入ってるし。瑠璃は？」

「この湖は青いけれど近くの河は赤い」

それは血の色ということなのか？

そんなものがいつも見えている？

それはどんな気分なのだろう？

よく正気を保てるものだ。

「村に近づくほど森は血塗られていく。村には濃い血臭が立ち込め
ているわ」

口にする瑠璃の方が傷ついているようで、なにもできないから、
救ってやれないから、ただ抱き締めた。

見たくなくても、そんな現実を見るしかない瑠璃を。

「血臭が死臭になったら、この部落は終わりよ」

「だから、戦を止めたのかい？ たしか言っていたよね？ 人の生命を奪い合う戦は、天命の理に背く行いだから、いつか報いが襲うと」

今ならあの言葉は巫女としての託宣だとわかる。

問うと瑠璃は小さく頷いた。

「あなたには感謝しているのよ、真弥」

「え？」

「あのとき、あなたに逢って戦がなんなのか、剣士がなにをする仕事なのか、そういつたことを教えられなかったら、きっと気づかなかったから。」

あなたにはわかりにくいかもしれないけれど、巫女の力は正しく理解した上で行われないと意味を違えてしまうの」

「それは村長がきみを騙して戦の託宣を求めた場合、それが悪い方向へ働くものなら、きみがそうと信じて言った託宣も、意味を変えらるというのかい？」

「そうよ。あなたから色々なことを教えられたから、わたしは現実に気づけたのよ。それは感謝しているわ。それにあのままだったら、あなたにも迷惑をかけたもの。わたしは真弥を護りたかった」

愛しかった。

巫女としての役目でもあったのだろう。

滅びへと向かう部落を救いたいという気持ちも本物だっただろうが、その中に人を殺せないのに戦場に赴かなければならない真弥を気遣う心が、護りたいと思ひ詰める気持ちがあった。

そう思うと無性に愛しくてならなかった。

「気づいたときは愕然としたわ。あれほど輝いて見えた部落が今は淀んでいる。滅びへとはつきりと向かっている。その意味を村長の託宣を求める声で知ったわ」

好戦的で貪欲な村長の思惑を瑠璃は、巫女としての力で見抜いたのだろう。

狡猾な村長が舌打ちする姿が見えるような気がした。

瑠璃に先手を打たれてしまえば、村長がどんなに戦を起こしたくてもできないのだから。

第3章 枯れ草の寝台（6）

「きみが自分を責めるようなことじゃないよ。たとえきみが巫女だとしても、だよ。選ぶのは人間なんだから。そういうときに止められなかったことで、きみが自分を責める必要はないよ。裏切りは人間だけの悪徳だからね」

「そうね。それが天命の理なら、確かにどうすることもできないわ」
そのときにすべてが終わると、瑠璃の悲しそうな顔が言っていた。

こんなに細い肩に大勢の生命がかかっている。

そう思うとたまらない。

どれほどの重責に耐えているのだろうか？

なんとか機会を作ってなるべく早く彼女を救い出したい。

そのために人を殺すことになっても。

「瑠璃」

「なあに？」

見上げてくる瑠璃に以前は見られなかった女の子らしい優しい輝きがあった。

甘えてくれていると思うと、それだけで嬉しい。

たったひとりの愛しい女性に頼られるって、嬉しいことなんだと今更のように噛み締める。

「きみのことは色々と聞いたから、今度はぼくのことを聞いてほしい」

「話してくれるの？」

「きみにここまで打ち明けさせたのはぼくだよ？ 自分の言葉を裏切るような真似はできないよ。それにきみには聞いてほしいし。ただ」

「ただ？」

「なにを聞いても自分を責めないでほしい。それだけは約束してくれるね？」

瑠璃は意味を理解しかねていたらしいけど、やがてしっかりと頷いてくれた。

「ぼくはね。小さい頃はそれなりに恵まれていたと思うよ。優しい両親に愛されて育ったし。でも、10歳になったときに両親を亡くしてしまった」

「そう。でも、思い出はあるのでしょうか？」

「そりゃあね。悲しい思い出もあるし、楽しい思い出もあるよ。思い出すと切なくなるけど」

「過去に囚われてはいけないわ、真弥。あなたがご両親に愛されていたのは事実でしょう？ その結末がどれほど悲しいものでも、あなたがそれに負けて楽しい思い出さえ、悲しいものに変えてしまつたら、亡くなつたご両親が可哀想だわ。きつとあなたのことが心配で、黄泉の国でも安心していられないもの」

「……そうだね」

苦い笑みになつたけど、すぐに後悔した。

巫女の境遇がどういうものか、はつきり知らなかつたせいで。

「わたしには両親の記憶そのものがないもの。あなたはそれだけでも恵まれているのよ？」

「……ごめん。無神経だつたよ」

巫女の素質が確認された時点で、神殿に引き取られ、後継者として育てられる。

そのことは知っていた。

でも、まさか両親の記憶すらないなんて思わなかつたのだ。

それなら真弥の方が恵まれていただろう。

少なくとも愛されて大切にされた楽しい思い出がたしかにある。

「これからはぼくが瑠璃の家族になるよ。楽しい思い出をあげるから」

悲しみを瞳に浮かべながらも、瑠璃は嬉しそうに笑ってくれた。

強がりの笑みですらなかったことが却って痛々しかった。

「突然、両親を亡くしたぼくを父の親友だったおじさんが引き取ってくれたんだ。そこには幼なじみの少女もいて、そこからかな。ぼくが笑えなくなっていったのは」

「え……」

「幼なじみのその娘は、ぼくにすくなくなつてくれていてね。小さい頃から後ろをついて回っていたし、小さい頃はそれだけで、ぼくもやんちゃな幼なじみに、ちよつと扱いに困るなという程度の気持ちだった。でも、成長するほどだんだん度を越してきて……」

「どつという意味なの？」

「なに不自由ない暮らしを保證されていて、周りから大事にされて、自分は常に正しい。なにひとつ間違つてない。どんな望みも自分が口にすれば許される。そういう考えを当たり前のように持っていた」

人は罪を犯して生きる生き物だと瑠璃は思う。

どんな人間だつてなにかしらの罪は犯している。

自分だけは間違つてないなんて、だれにも断言できない。

なのにそれを信じて育つた少女もいるなんて信じられなかった。

「何度、説得してもわかってくれないうんだ。そういう態度を続けて、そういう考え方でいたら、本当の友達なんて得られない。孤立するだけだつて。でも、遂にわかってもらえなかつたけど」

なにを言えばいいのかもわからないと、瑠璃の複雑な顔が言っていた。

真弥が複雑な境遇らしいということは知っていた。

性格的に考えればそういう少女に、真弥が好意を寄せるといっのはありえない気がする。

むしろ苦手なのではないだろうか？

それでもお世話になっていたら、あまり強いことも言えないだろう。

だから、真弥はあまり激しい感情を表に出さない。

いつも笑っていて鷹揚に見えているのは、おそらくその反動。

真弥は自分でも知らないあいだに、周囲にも気づかれないように、自分を殺して生きてきた。

もしそうだとしたら真弥が素顔を見せてくれていたのは、瑠璃の前だけかもしれない。

第3章 枯れ草の寝台（7）

自惚れかもしれないけれど、真弥は瑠璃の前でだけは本心から笑ってくれていた。

そう思うから。

「今も辛い？」

心配そうな声にふと真顔に戻って、真弥が嬉しそうに笑い、かぶりを振った。

「きみがいてくれるから辛くないよ、瑠璃。きみが傍にいてくれて、ぼくを想ってくれて、そうして笑ってくれるなら、それだけでぼくは救われる。きみの微笑みがぼくの心の支えになるから」

飾らない言葉。

言葉に嘘などないと瑠璃にもわかる。

嬉しいのと同時になんだか恥ずかしくなった。

「ただね。きみにも薄々わかっただろうけど、ぼくの意志とは関係のない部分で、まあ色々と噂される立場にいてね」

「それって……幼なじみの少女のこと？」

複雑そうな問いに真弥は頷いた。

「想われていることは知っていたんだ」

「……」

「きみには変な誤解をされたくないし、隠していて勘繰られるのもいやだから、敢えて正直に話すけど」

この前置きですこし不安になった。

真弥とその娘は、ただの幼なじみではない？

「ぼくも最初は意思表示をはっきりしていたんだ。多少は遠慮をしていたけど、だからといって心に添わないことを強制されるのはいやだったから。だけど、彼女は無意味に力を持ちすぎていた」

「力？」

不思議そうな瑠璃に真弥は苦笑する。

「瑠璃のような不思議な力じゃないよ。言わば権力さ。人が必ず屈するものだよ」

「権力。そう。そうなの」

「小さい頃から独占欲が目立って、おまけに境遇的にワガママに育つてさ。自分が好きならぼくも好き。そう信じて疑わないんだ」

ある意味で素直で正直な少女なのかもしれない。

間違っていることでも、それが正しいと信じていたら、素直に思

い込めるほど。

それは悲しい素直さだと瑠璃は思った。

「何度かは違うつて言ったし、まあそういう問題で言い争ったりしたけど、全然わかってくれないんだ。ぼくの言うことなんて信じてもくれない。叶わない望みなんてないから、必ずぼくは手に入る。そう思っているみたいだね」

「……人の心つてそんなふうに強制で動くものなの？」

眉を寄せた瑠璃の声に「まさかっ」と言い返した。

優しい瑠璃には、そういう傲慢さが信じられないのが、理解できないと顔に書いていた。

「それは幼なじみとしては、ぼくも好きだとは思っているけど、正直に言えば苦手なんだ」

やっぱりと言いたげな顔だった。

そんなにわかりやすいのだろうか？

真弥の好みつて。

「もし生まれや育ちが違って、幼なじみとして物心つく前から一緒にいなかったら、ぼくはまず彼女には近づかなかつたよ。はっきり言って傷つけるのもなんだと思ったから、今はまだそういうことは口にしていないけどね」

「どついつ生まれ育ちであれ、人から欠点を指摘されたら直す努力が必要だわ。その娘はそんなことすらしないの？」

「しないんじゃないかって、どうしてダメだと言われるのか、何故自分がいけないのか。まずその辺からしてわかっていないんだよ」

これには瑠璃は絶句していた。

それだけ彼女が純粹だということだろう。

「彼女の常識の中には、間違っているのは自分かもしれないという考えそのものが存在しないんだ」

「それで家を出ることにしたの？ 我慢できなくなっただけ？」

ため息まじりの問いかけにかぶりを振った。

瑠璃がきよとんとした顔になる。

「彼女は独占欲が強いって言っただろ？ しかもどんなワガママでも通る境遇にいるって」

頷くと真弥は何故かため息をついた。

「一緒に暮らすようになる前から、ぼくが他の女の子と仲良くしていたり、ひどいときは一緒にいるだけで相手を苛めるんだよ」

「そついつ真似はよくないわ」

複雑そうな声だった。

真弥の恋人としての意見か、それとも巫女としての意見か、一体どちらだろうか？

瑠璃は優しいから。

「これが徹底しているというか、ほとんどの女の子が彼女の取り巻きだったし、男だって彼女の生家がもつ権力を恐れて、面と向かって逆らわない。

だから、ぼくのせいで彼女に睨まれた娘は、ひどいときは対人恐怖症になったり、もっとひどいときは死のうとした娘までいたよ」

「真弥」

真弥がそのことで自分を責めるのを気遣うような声だった。

やりきれない。

自殺騒ぎはただの一度だったけれど、あれ以来、真弥は孤立する道を選んだ。

自分から進んで人と付き合いなくなった。

真弥が神秘的と言われる原因を招いた事件だったのである。

第3章 枯れ草の寝台(8)

「それ以来ダメなんだ。人に近づくのが怖くて。自分のせいでだれかが苦しむかもしれない。そう思うとだれかと親しくなることができなかつた」

「あなたがめつたに本心を見せずに、いつも笑ってばかりいるのは、そのせいだったのね。でも、あなたが自分を責めるようなことではないわ」

そうやって孤立しても、現状は変わらない。

黙って耐えて我慢しないで、自分の気持ちははっきり言うべきだ。

それで傷つけても、争っても。

一度は立ち直れない状況になっても、いやなことはいやだと言わないあいだは、真弥には自由はない。

真弥がはっきり言わなければ、よけいに自分の過ちにも思い込みにも気づけない。

真弥が黙って耐えているかぎり、由希の勘違いを増長させる。

瑠璃にそう言われて理解できたから首肯した。

真実を言うならとつくに決別しているのだけれど。

「だから、ね。おじさんから彼女の気持ちを受け入れて、一緒にな

つてくれないかと言われたとき、いい機会だからとはっきり拒絶したんだよ、ぼくは」

「え？ それって……」

「瑠璃？」

声に動揺を感じて振り向くと、瑠璃は何度も瞬きをしていた。

「まさかその幼なじみの少女って……」

大体わかったらしい瑠璃に苦い気持ちで頷いた。

「わかったみたいだね。そうだよ。きみのお傍付きとしてあがっている由希だよ」

「あなたが由希の……。じゃあ由希が縁談を断られたのは……」

自分のせいかと責める口調だった。

だから、振り向いて瞳を覗き込みはつきりと口にした。

「たしかにぼくが由希との縁談が出たときに断ったのは、ぼくの心が瑠璃のところにあつたからだよ。だけど、そのことで瑠璃が責任を感じる必要はないからね？」

「でも、わたしさえいなければ……」

「それは違うよ、瑠璃。たとえきみと出逢っていなくても、そのときのぼくに想いを寄せる相手がいなかったとしても、由希との縁談

なんて受けないから」

「真弥」

泣いていいのか、喜んでいいのかわからないと、その複雑そうな顔が言っていた。

「言っただろう？　ぼくが由希のことをどう思っているのか。こんなことは言いたくないけど、ぼくは由希を受け入れられない。彼女は恋愛対象にはなれないんだよ」

彼女の気性故に。

「由希ってそういう少女なの？」

「え？」

怪訝そうな声に驚いた。

瑠璃は納得できないと顔に書いて悩んでいる。

どつという意味だろうか？

「わたしは由希が好きよ？」

「瑠璃」

「それはたしかに気は強いかもしれない。多少はワガママな面もあるわ。でも、由希は優しいもの」

「由希が優しい？」

意外な言葉だった。

どこをどうすればそうなるのか、もうひとつわからない。

「わたしをお忍びに出してくれているのは由希なのよ」

「え？」

驚いた顔になる真弥に瑠璃も怪訝そうに彼を見ていた。

「この衣装も目立つ黒髪を隠すためのかつらも、すべて由希が用意してくれたのよ。閉じ込められているのは窮屈だろうからって。わたしがいないあいだ周囲をごまかしてくれているのも由希よ。あの由希がそんな一面を持っていたなんて……」

信じられない言葉だった。

あのワガママで傲慢で、人は自分に合わせるものと信じ込んでいた由希が、自分からだれかを気遣うことがあるなんて想像もしなかったから。

でも、だったら尚更危ない。

真弥のことがバレたら、由希は裏切られたと思うだろう。

自分は利用されたのだと。

そうしたらどんな真似をするかわからない。

たしかに現状を見れば、そう思えるかもしれない。

だが、瑠璃は由希を裏切っていないし、真弥と知り合ったときも、まして想いが通じ合ったときも、お互いに由希の存在については知らなかった。

どちらにも由希が深く関わっていることを。

瑠璃の様子から見て彼女の由希への友情は本物だろう。

だが、おそらく事実を知った由希には通じない。

瑠璃はまだ知らないのだ。

ワガママに自己主張をするときの由希の身勝手さを。

第3章 枯れ草の寝台(9)

「こんなことを言っ てきみに軽蔑されたくないし、たぶん今の話を聞いたかぎりだと、瑠璃には理解できないかもしれないけど」

「なに？」

「由希に心を許してはダメだよ？」

「そんな……」

「絶対にぼくのことを知られたらいけない。そんなことをしたら、きみがどんな目に遭うかわからないから。心配なんだよ、瑠璃」

「由希はそんなこと……」

信じられないとかぶりを振る彼女の名を呼んだ。

怯えたような黒い瞳が見上げてくる。

「きみは知らないんだよ。たぶんきみが由希より立場が上だから、由希は普段みたいな態度は慎んでいるんだと思う。きみはまだ由希の一側面しか知らない。」

「いいかい？ もしきみがうかつにぼくの名前を出したり、ましてやぼくとの関係を打ち明けたり悟られたりしたら、下手をしたら殺されるよ？」

「……」

「由希がきみの傍にいる本当の動機くらい、聡明なきみのことだから知っているんだろ？」

傷つけるとわかっていても問いかければ、瑠璃は落ち込んだ顔でうつむいてしまった。

それでもどれほど危険なのかわかってもらうために、これだけは譲れない。

瑠璃を護りたいから。

「その由希がきみにとって不利な証言をしたら、それが偽りでも真実にすり替えられてしまう。いいね？ 絶対に由希を信じたらダメだよ？」

「でも」

「由希のことは自分の責任で片付けるから。きみはなにも気にしないでいいよ。元はといえば自分のせいだし。本当に由希のためを思うなら、傷つけても真実を突きつけるべきだったんだ」

真弥はどんなときでも人を貶めるような発言はしない。

付き合いは短いが、色々な話題で会話してきた瑠璃ですら、真弥が面と向かってこうい言う方をするのを初めて聞いた。

今まで一度だってだれかの悪口を口にすることがない。

その真弥が真摯に言ってくる。

どっか自重してくれ、と。

警戒してくれ、と。

真弥は瑠璃がそういうことを嫌っていることを知っている。

それでも敢えてくちにするほどだから、よほど心配しているのだろっ。

ありえないことだと笑い飛ばせないほど。

あの由希がそんな真似をする少女だとは思いたくない。

でも、真弥がこれほどまでに心配してくれていて、それを無視することも瑠璃にもできなかった。

「……わかったわ」

ホッとしたように笑う真弥に、それでも瑠璃は問わずにはいられなかった。

「でも、本当にわたしはなにもしなくていいのかしら？ 由希がずっと想ってきた人を知らなかったとはいえ、わたしが奪ってしまったのよ。それなのに知らないフリをしてもいいのかしら？」

不安そうな声に真弥がかぶりを振る。

彼女の純粹さわ責任から逃げ出さない一面までは、真弥も好きだし長所だと思っているが、これだけは認められなかった。

「もし由希がすこしでも物の道理がわかっていて、ぼくらの話をきちんと聞いてくれる少女だったら、ぼくもこういうことは言わないよ。」

でもね、瑠璃。きみが事実を打ち明けたら、由希の怒りを煽るだけだよ。きみの誠意も友情も由希には通じないから。きみと由希では違いすぎる。これ以上は近づかないでほしいよ、ぼくは

「真弥」

「それにこれは本当にぼくの問題なんだ。ぼくたちふたりに由希が深く関わっているから、そしてきみが由希のことが好きだから、そういうふうな責任を感じてしまうのかもしれないけど、わかっているんだ結末ではないだろうか？」

たしかにそうだ。

真弥が由希の想い人だなんて瑠璃は知らなかった。

そして真弥の告白を信じるなら、瑠璃と由希の繋がりを知る真弥自身も、瑠璃を選んだ時点では素性に気づいていなかった。

つまりどちらもが由希という存在に気づかないまま、お互いを選んでいたのである。

惹かれ合ったことに由希の存在意義は絡んでいなかった。

だが、この現状は由希から見れば、そうは見えないだろう。

きつと裏切ったと思われる。

責められる。

友情を利用したと。

好意が裏目に出た由希には、そうとしか思えないだろうから。

本当に自分を抑えない由希が、真弥の言ったような少女なら、おそらくこちらの言い訳には耳も貸してくれないだろう。

ワガママに育てられた気性そのままに裏切ったと信じ込み、すべて瑠璃が悪いのだと、自分は裏切られ利用された被害者で悪いのは瑠璃だと思いつまむだろう。

第3章 枯れ草の寝台（10）

どれほど言葉を尽くしても、おそらく信じてはもらえない。

知らなかったという言葉も、由希には言い訳に聞こえるだろう。

知っていて裏切ったと信じて疑わないはずだ。

だから、真弥はこれほど心配してくれている。

あの由希がそんな理不尽な少女だとは思いたくないけれど。

それとも恋愛を間に挟んだ場合、奪い合う関係になった親友は、もう元には戻れないのだろうか。

「真弥は」

「なんだい？」

「真弥はわたしと出逢ったとき、だれとも付き合っていなかったの？ だれも好きではなかったの？」

真弥の心がどこにあったのか。

そのひとつですべての意味が変わってくるような気がした。

もし特別なだれかがいたり、本心ではなくても由希と付き合っていたなら、悪いのは瑠璃だということになるから。

知らなくても。

だが、この問いに対する真弥の返事はすこし意外なものだった。

「なにも隠さないって決めたから打ち明けるけど、ぼくの立場から言わせてもらうと、だれとも付き合ったことなんてないし、瑠璃と出逢ったときのぼくは、まあ言ってみれば自由な身だね。だれとも約束なんてしていないし、想いを寄せてもいなかったから」

「それって違う見方もあるってこと？」

「っていうか。なんて言うんだろう？　ぼくはあまり感情を表に出さなかったし、色々複雑な境遇で育っていたから、はっきりした意思表示はしなかったんだ。」

特にそういう問題では。うかつにだれかに近づいて傷つけるのは怖かったし。そのせいでなんでも適当に受け流す癖がついていて、信念に関すること以外だと、わりと淡泊だったんじゃないかな？」

首を傾げながらの科白は、理解できるような気もしたし、理解できないような気もした。

真弥の境遇なら無理もないのだろうが、瑠璃と逢っているときの真弥は自由な感じがしたから。

それをそのまま口に出すと真弥が笑った。

おかしそうに。

「それは相手が瑠璃だからだよ。瑠璃といると自然体でいられたから」

微笑んで言われてちょっと照れた。

「ただ。あまりにも意思表示しなすぎたのかな？ ぼくとしては波風を立てないための言動で、特に深い意味はなかったんだけど、回りはぼくと由希は付き合っていると思っ込んでいたみたいだね」

「それって…… 由希も知っていたの？ 由希もそう思っていたの？ あなたと付き合っていると」

「由希の常識で言えばそうなるんじゃないかな？ 言わなかった？ 自分が好きならばくも好きだって、由希はそう信じてるって」

あっさり言われ言葉に詰まった。

なにを言い返せばいいのかわからない。

「言っておくけど由希が勝手に、ぼくは自分のものだと思っ込んでいただけで、ぼくは一度もそれを肯定したことはないし、由希がそういう意味で独占しようとしたら、きちんとクギを刺して断ったからね？ あくまでも由希の一方的な感想だから」

その辺は誤解しないでほしいんだと真弥が言う。

しかしそれでは由希は付き合っていたつもりだったのか、それとも片思いだと知っていたのか、一体どちらだろう？

「うん。由希本人は気づいていたんじゃないかな。ぼくがそういう意味での束縛を認めないことを、どんなに認めたくなくても知っていたからね。」

現実には由希のワガママには付き合わなかったし。ただそれでもそういう誤解が罷り通っていたのは、おそらく由希がそう仕組んだんじゃないかな」

「どうして？ そんな身に覚えのないことで、そういう解釈をされたら真弥が可哀相じゃない。遠隔的に自由を奪うようなものだわ」

「たぶん、由希が否定しなかったのは、そういう意味だと思うよ」

この一言には答えられなかった。

由希の話題だと思わなかったらあまりの理不尽さに怒っていただろう。

いくらなんでもワガママが過ぎる。

「だから、ぼくらのあいだでの真実と、周囲との解釈がすれ違っていたんだ。おまけにどうも当事者のぼくが、噂を知って否定できないように、ぼくには伝わらないように噂を流していた感があるんだよね……」

「嘘」

やれやれと言いたげな科白に、思わず彼を凝視してしまっていた。

あまりといえばあまりな境遇である。

これでは気軽に打ち明けにくいだろう。

真弥が自分のことを打ち明けなかったのも無理はないと納得して

しまつた。

第3章 枯れ草の寝台（11）

「由希との縁談を断って家を探しはじめたことが原因で、初めて知ったんだよ。周囲がそう誤解してるってことを」

「それまでなにも知らなかったの？」

「みんなぼくと由希は付き合っていて、将来的にはぼくが由希の家を継ぐものと思っていたから、そのぼくがいきなり家を探しはじめたことで、疑問を持ったらしいんだよね。」

そのせいでやっと知ることができて、さすがに呆れたよ。ここまでするか？ って本気で怒ったし。でも、怒りが強すぎると却って呆れてしまって感情は凍るものだね」

あまりに淡々としているから、却って彼のそのときの怒りの強さが伝わってくる。

好意も善意も通じない現実を前にして、彼はどれほど理不尽な怒りに震えたのだろう。

気の重そうな告白にそつと彼に凭れかかった。

なんだか疲れきっているような気がして。

真弥は驚いたらしいけど、すぐに笑った気配がして、強く肩を抱いてくれた。

抱きしめることで甘えてくれている。

はつきりとそれがわかった。

口にも態度にも出さなくても、束縛する由希の問題で真弥は疲れ
ていたのだと。

だから、気を抜くとため息が出る。

瑠璃の前では笑っていてくれたのは、さっき言ってくれたことが
真実だからこそだろう。

真弥の心の安らぎになりたいと、今は強くそう思う。

「家は見つかったの、真弥？」

一言問うと答えが返ってこなかった。

不安に思って腕の中から見上げれば、なんだかいやに深刻な顔を
している。

まさか……と不安になった。

真弥の感想がすべて本場で、由希がそういう少女なら、真弥が離
れていこうとすることを黙って受け入れないような気がしたから。

「なにか……あったの？」

「……ダメなんだ。妨害されて見つかったと勝手に邪魔が入って、
ね」

「そんな……」

真弥から聞く由希の話は瑠璃には予想外のことばかりだった。

同じ名の別人ではないかとすら思う。

「まあ今では覚悟を決めているけど」

「え？」

驚いた声を出すと真弥が振り向いて笑った。

「今は大人しくみせておいて、隙ができたなら君を連れて逃げようか
なっ」

夢のような話だった。

信じられずに彼を見上げていても、その笑顔は消えない。

決意に偽りはないと、その瞳が言っている。

流れる涙を真弥の指先が拭ってくれる。

そんな仕種さえ愛しかった。

「君が手に入ったら、そうする気だったんだ。最初から。だから、
家を探しながらも、気持ちを通じ合えば無意味だとも思っていたし
ね」

クスクス笑う真弥に、その胸に顔を埋めた。

聞こえてくる鼓動。伝わるぬくもりが心地いい。

「大好き」

「うん。もう知ってるよ。ぼくとしては早く妻に迎えたいけど」

笑って言われて肩が震えた。

その一瞬、抱き締める腕に力が入って、ただの言葉遊びだとは思えなかったから。

真弥の妻になる？

考えてみればどちらもが孤独な存在だった。

瑠璃は隔離されてひとりで生きてきた。

真弥は隔離こそされていないけれど、由希のために自由がなかった。

お互いに腕が伸びたのは、そのせいかもしれない。

だれよりもわかり合える。

そして信じ合える。

求め合える。

「真弥が」

「え？」

「真弥がそれを望むなら」

「瑠璃」

はっきりと理解していたわけではない。

でも、真弥がそれを望むなら、別に構わなかった。

抱き締める腕が震えている。

悩んでいるような短い間が空いて、真弥が耳許でささやいた。

「巫女として育てられたきみは、たぶん、現実的な意味で理解していないと思う。後悔してもやめないよ？ 泣いても解放しないよ？ そのときは必ずきみをぼくの妻にする。それでもいいのかい、瑠璃？」

言われたとおり言葉の意味はわからない。

でも、それが真弥の望みならいい。

真弥の望みは瑠璃の望みだから。

微かに頷くともう一度抱き締める腕が強くなった。

唇が重なって驚いた。

硬直した身体を真弥が抱いてくれる。

真弥が目を閉じているから、彼を真似して目を閉じた。

ぬくもりだけを追うような変な感じがする。

いきなり地面に押し倒されたときは、条件反射で逆らってしまったけれど、宣言どおり真弥は解放してくれなかった。

時々ささやかれる。

愛しているよ、と。

その言葉にすべてを委ねて目を閉じた。

秋も深まる枯れ草の寝台で。

第4章 破滅への予兆（1）

真弥の妻になったのは、まだ日暮れ前の早い時間だった。

場所が郊外ということや季節的な問題もあり、彼なりに気を使ってくれたらしい。

そういうの常識なんて瑠璃は知らなかったけれど、妻になった後の真弥の科白を信じるなら、こういうときにすぐに傍を離れ放り出すのは、夫として最低な行為なのだという。

目覚めるまで傍にいて、腕の中で目覚めさせて、そうして朝までを過ごす。

それが当たり前なのだと言っていた。

瑠璃の立場上、それができなくても、せめて妻に迎えた後に心細い想いをさせたくない、真弥の妻になったことを後悔させたくない、彼はそれは氣遣ってくれた。

巫女が夫を迎えることが禁じられているのは、俗世の汚れを知ること、その能力が失われるからだと言われている。

事実、瑠璃もそう言われて育ったし、だからこそ禁忌を犯してはならないと言い聞かされてきた。

そのときは死罪だと殺されると言われ続けてきたのだ。

真弥は瑠璃のことを巫女としては見ていないのか。

力については特になにも言わなかった。

落ちたのかと気にすることもなかったし、力のあるなしには拘ってはいないようだった。

むしろ巫女ではない、ひとりの女の子として見てくれているらしく、あまり特別扱いはしない。

ただ無事に脱出するまでは、勘づかれないようにしてほしいと言っていた。

力の有無ではなく、真弥との関係に気づかれないようにしてほしいと。

だから、自分から言つつもりはなかったのかもかもしれない。

彼の性格からして世間知らずな瑠璃を騙してたぶらかすつもりなどなく、純粹に脱出するまでに悟られたら、瑠璃の身が危ないと気遣ってくれたのだろう。

そのせいだろうか。

瑠璃も彼と別れ神殿に戻るまでに力が消えたとか、そういう話はしなかった。

故意に。

言えばたぶん彼をもっと不安にさせたから。

「巫女のカ」

神殿の近くまで戻ってきてから、ふと掌を見る。

失われるべきものなのかもしれない。

「こういうとき、本来なら持っていてはいけない力なのかもしれない。」

「人にあらざる力は人となったとき、失うべきものなのかもしれない。」

「もしも人並みの幸せを欲するのなら。」

「ねえ。わたしはどうすればいいの？ このまま知らないフリをするべきなの？ こんなとき、だれも答えをくれないわ。神ですら道を指し示してはくれない。」

泣きたかった。

切なくて……。

いつものように留守をこまかしてくれていた由希の元に戻ると、彼女はほっとしたように笑った。

いつもより戻ってくるのが遅かったので、バレたのではないかと、もしくは瑠璃の身になにか起きたのではないかと、気遣ってくれていたらしい。

苦い笑みを彼女に返した。

「どうかなさったのですか、瑠璃さま？」

疑ってなどいない由希の信頼の瞳。

気遣ってくれる瞳。

たった今、彼女を裏切って彼女の一番大切な人を夫に迎えたというのに。

どうするべきか、すぐには答えを出せそうにない。

真弥は関わるなど、これは自分の責任だと言っていたし、彼の思いやりを無にする決意もできなかったから。

でも、それを受け入れて知らないフリを続ける決意も、やはり瑠璃にはできなかつた。

どうするべきなのか、ゆっくりでもその答えを出さなければいけないだろう。

どんな結果になっても後悔しないだけの決意ができれば。

それは二重に由希を裏切る決意なのか、それとも真弥を裏切る決

意なのか、瑠璃にはわからなかったけれど。

知らないフリをして残酷に、自分の望みに従うためには、瑠璃の力が邪魔だった。

だから、苦しい。

だから、切ない。

真弥にすら言えなかったことだけれど。

「由希」

「はい？」

「今日、あなたの住んでいる村に行ったわ」

「え？」

なにを言いたいのかわからないと由希の顔には書いていた。

「噂を聞いたの。あなたの噂」

「どんな……」

「あなたが今していることの噂よ。心当たりがないの？」

悔しそつに唇を噛む由希に、瑠璃はため息をつく。

これだけは今、言わなければと思っていた。

彼女を本当の友達だと思えるなら。

第4章 破滅への予兆(2)

「嘘だと思ったわ。わたしのよく知っている由希なら、そんな真似はしないとも思ったわ。でも、話を総合していくと、どうしてもあなたになるのよ」

「瑠璃さま」

「村長ですら適わない大富豪のひとり娘。そして由希という名。年齢。すべてあなたを意味していたわ。どれほど自分の耳疑ったかわかる？」

「あたしは……」

顔をあげてなにか言いかけた由希を、じっと見つめる。

それだけで彼女はなにも言えないようだった。

「わたしにはあなたの気持ちはわからないわ。結婚することなんてありえない巫女だもの。すつと想いつづけてきた人に断わられたあなたの辛さは、どんなにわかってあげたくても、わかってあげられない」

「なにをおっしゃりたいのですが、瑠璃さま？」

挑戦的な眼だった。

譲らない口調だった。

今になって真弥の言葉の正しさを知る。

瑠璃はまだ本当の由希を知らない。

由希はただ瑠璃の方が立場が上だから、自分が仕えるべき立場だから、だから、本当の自分を見せていなかったのだと。

あるいは由希の友情だと信じていたものは、ただの優越感からくる同情だったのかもしれない。

そんなことはないと思いたくないと思うけれど。

「答えはあなた自身が気づくべきことよ、由希。けれど、一言だけ言っておくわ。そういう問題ではなくても、強制では人の心は動かないのよ」

「……なにもご存じなくせに初恋すら知らないくせによく言えますね。それも巫女としての託宣ですか」

侮蔑と揶揄の混じった口調。

眼を逸らしたかったけれど、これが本当の彼女だと、まっすぐに捉えた。

ある意味で今、初めて本音で触れあっているのだとわかるから。

「わからないの？ あなたは人の心を無視しているわ。人の生きるべき標を誤っているわ」

「……あなたにはわからないことです。放っておいてください」

「そうね。でも、あなたを友人だと思っから忠告しているのよ?」
「……………」

「あなたのやり方は逆に相手を傷つけて遠ざけるわ。きらわれるわ。それがわからないの?」

「ここまで言っても由希の表情は変わらなかった。

なぜそんなことを言われなくてはいけないのかわからないと、その顔に書いて瑠璃を睨んでいた。

本当に彼女の心には自分が間違っているのかもしれないという考えそのものが、欠如しているのだと思いきらされた。

「今日はもう帰って、由希」

「瑠璃さま……………」

「これ以上なにを言っても、あなたの心にわたしの心は届かないでしょう?」

「あたしは……………」

なにか言いかけて、でもなにも言えずに、由希はそのまま瑠璃の部屋から出て行くこととした。

その背中に視線だけを向けて、瑠璃は一言だけ問うた。

「由希。あなたがわたしに優しくしてくれたのは、わたしが信じていたようにあなたの純粋な友情ではなく、束縛され自由のないわたしに対する、ただの同情だったの？ あなたよりわたしのほうが不幸だと優越感を抱けたから、同情して優しくできたの？」

否定してほしかった。

一言違うと言ってほしかった。

でも、由希は一度だけ振り返り嘲笑った。

「そうですね。そうかもしれません」

「……」

「所詮あなたはただの籠の鳥でしょう？」

それが由希の本心なのか、それともさっきまで責められたせいで疑われたことから、そう言ったのか、瑠璃にもわからなかった。

いや。

わかったと言つべきだろうか。

これは彼女の本心。

けれど、すべてでもない。

瑠璃を気遣って優しくしてくれた友情もまた本物だった。

ただその根本にあるものが同情だったというだけのことだ。

だから友情なのだ。

由希はあまりに甘やかされて育って、好意を示すことに不慣れだった。

人に好かれることを知らず、背かれることも知らず、自分が立っている場所もわからない。

そんな由希が憐れだった。

第4章 破滅への予兆(3)

「……可哀相な人……」

思わず零れた眩きを由希はどう受け取ったのか、なにも言わず出て行った。

どうして疑われたのか、そのことにすら気づかない。

なんて可哀相な少女だったのか。

あれでは本当に孤独なのは彼女の方だ。

少なくとも瑠璃はひとりぼっちではないのだから。

—
今までなら由希がいたし、彼女の友情が半分くらい同情でも、一緒に過ごした時間は嘘じゃない。

そして今は愛してくれる夫がいる。

でも、彼女にはなにもない。

本心から気遣ってくれる人もいなくて、愛してくれる人もいない。

本当に孤独なのは由希の方だった。

今になってそのことに気づいてため息が出る。

もっと早く彼女が子供の頃に、それを知ることができたら、瑠璃

にもどうにかしてやれたかもしれない。

でも、人格が形成された今、もうどうすることもできない。

どんなに誠意から言葉を尽くしても、由希には理解できないのだから。

彼女の想い人が真弥だと知っている今、あんな助言をすることが嬉しいわけがない。

もし真弥を解放したくて、彼女の友情を利用しようとしたなら、もっと上手く説得している。

それをしなかったということは、彼を愛する瑠璃には、ひどく辛いことなのだ。

こうすれば上手くいくと教えるようなものだから。

それでも言ったのは由希への友情から。

けれど、それは通じなかった。

真弥の言葉どおり。

『瑠璃と由希とでは違いすぎる』

そう言った彼の言葉が胸に痛かった。

瑠璃に言われ定時より早く家に帰った由希を待っていたのは、この頃は無視していた真弥だった。

入ってきた由希をじっと見て、一度深いため息をついた。

「明日、この家を出ていくよ」

「え……」

啞然としてから彼を睨んだ。

出ていけないように、住める家が見つからないように、裏から手を回していたはずだった。

だれが由希を裏切ったのかと、そう思ったから。

「住む家が見つかったの？」

「それは由希が一番知っているだろう？」

真弥からの皮肉は初めてで唇を噛んだ。

瑠璃に責められ論されて、どういうわけか友情まで疑われて、今度は真弥に責められる。

どうしてなのかわからない。

だれも由希のしていることに抗議なんてしないし、それで問題が起きるわけでもないのに。

大事なふたりには間違っているとされる。

何故なのかわからなかった。

「住む家がなかったら、適当に雨露を凌げればそれでいいよ。とにかくこの家を出たいから、ぼくは

「どうして？」

「どうして？ もう君から自由になりたいからだよ、由希

はつきり言われて息が詰まった。

優しい真弥はだれかを責めたり否定したりしなかったから、はつきり迷惑だなんて言われるとは、これまで想像すらしなかった。

信じられないと彼を凝視しても、真弥は顔色ひとつ変えなかった。

それが変わらぬ決意だと教えるように。

「君は何度言ってもわかってくれないね。どうしてぼくがこの家をおんなに早く出ようとしたのか、一度だって考えようともしなかった」

「……どういう意味？」

「自分のためじゃないよ。君のために出ていこうとしたんだよ、ぼくは」

「あなたがいなくなることのどこがあたしのためだっていうのよっ
!?!」

「君がどんなにぼくを想ってくれても、ぼくが由希を選ぶことは絶
対にないよ。由希に想いを寄せることはありえない。そんなぼくが
近くにいて、由希のためになると思ってるのかい、君は?」

「っ!!」

屈辱だった。

こんなふうに言われるとは思わなかったから。

これではまるで由希のことなど意識する対象にもなれないと宣言
しているようだ。

第4章 破滅への予兆(4)

「またきみらしく解釈してるみたいだけど、ぼくはきみを侮辱してるわけじゃないよ?」

「どこが違うの?」

「言ったはずだよ? きみを愛せないぼくが傍にいることは、きみのためにならないって。きみのためじゃなかったら、ぼくはおじさんの好意にもっと甘えてるよ。ぼくがどんなに家を見つけたって、ここよりは劣るんだよ? それでこの季節に出ていくことがなにを意味するか、本当に由希は気づかなかったの?」

「好きになれなくても、傍にいてくれるだけで、あたしはっ」

叫びかけた由希を遮って、真弥がまたため息をついて言った。

「傍にいただけで満足? ありえないよ、そんなことは。ぼくがきみの傍にいて、違うだれかを愛して、そうして離れていっても、満足だって言える? 傷つかないって言える?」

「ありえないもの。そんなこと」

震える声で否定すると真弥はかぶりを振った。

「由希。ぼくはきみの所有物じゃないよ。自分の意思を持つてる。だれかを愛さないって、どうしてきみが断言できるんだ? その答えはぼく以外は持つていないはずだよ。そんなこと強制されたって好きになるときは好きになるし、愛せない相手は愛せないんだから」

瑠璃の説得が脳裏を過った。

どうして彼女と同じことを言うのだろうか、心の底から悔しかった。

もしかしたら巫女としては異端と言われてきた彼女なら、真弥とも共感できるかもしれないと、分かり合えるかもしれないと、ふとそう思った。

そう思うと腹立たしくて悔しくて涙も出ない。

瑠璃と由希のなかが違うというのか。

彼女もなぜ由希が間違っているというのか。

大事な人にはなにも分かってもらえない。

それともふたりが言っているように、本当に分かっていないのは、由希の方なのだろうか。

でも、だとしたら何故他の人はなにも言わない。

間違っているのなら、もっと大勢の人からきらわれるものではないのか？

だが、周囲の人から好かれているのかと、もし問われても答えられないことに気づいて、余計に悔しくなった。

なにも言い返せなくて。

「今までお世話になっていてという遠慮と、幼なじみとしてのきみにどうしても強いことが言えなくて、本心は言わないようにしていたけど……はつきり言うよ、由希。間違いは間違いだと指摘することが、本当は1番きみのためになることだと、今ならわかるから」

「真弥」

「由希はだれにもきらわれたことがないと思ってる？」

「そんなこと」

当たり前だと言おうとして、でも、真弥のまっすぐな瞳を見てみると、どうしても違うと言えなかった。

「きみは気づくこともしなかったね。みんな、その場、その場ではきみの意見に従うけど、いざというときにきみを優先してくれたことがあったかい？」

「……」

「みんなが本音を言わなかったり、きみに対して遠慮していたのは、きみに人として魅力があるからではなく、すべてこの家の権威だよ。みんなが恐れていたのは、きみの機嫌を損ねることで、この部落での立場が悪くなることだった。きみのことを本心から大事だと、友達だと思っていた人は、ぼくの知っているかぎりだと、ひとりもないね」

「ひどいことを平気な顔で言うのね、真弥……」

泣きだしそうだった。

はっきり言われて。

真弥もちよっと傷ついたような顔をしてそっと背けた。

「言うておくけど、こういう事実をきみに伝えるのが、ぼくには簡単なことだとか、平気なんだって誤解はやめてほしい。どうしても今まできみを傷つけられなくて言えなかった真実だから」

「言い訳じゃないっ」

「……そうだね。今まで知らなかった現実を突きつけられたきみにしてみれば、そんなことを言うばくの神経の方を疑うだろうね。でも、これが現実なんだよ、由希。その証拠にだれかきみの悩みに親身になって付き合ってくれる人がいるかい？ 損得抜きできみを気遣ってくれる人がいるかい？」

「ひどい」

泣きたいほど悔しいのに、真弥は居心地が悪そうに顔を背けてはいても、揺るぎない主張を譲らなかつた。

第4章 破滅への予兆(5)

「ひどいことを言っている自覚はあるよ。でも、言わないといけな
いことだから」

「傷つけることを言うことが？ それはあなたの放漫よ、真弥っ」

「違う。君のために言ってるんだ。憎まれても、だれかが言わない
と指摘しないと、君は気づけないだろう？ そうしたら君はいつま
でもひとりだ。だれも気遣ってくれない。だれも本当の友情を向け
てはくれない。それじゃあ、どれだけの取り巻きに囲まれていたっ
て、君はいつもひとりぼっちだよ。それがわからないの？」

本当に孤独なのは由希だと言われたようで別れ際の瑠璃の顔が脳
裏に浮かんだ。

同じように傷ついた顔をしていた。

もしかしたらあの問いは、否定してほしくて出した問いだったの
かもしれない。

同情じゃないと、本物の友情だと言ってほしくて言ったのかもし
れない。

そのくらい信じがたい現実を聞いたということだ。

由希の本当の姿を知らなかった瑠璃にとって。

だから、問うた。

否定してほしくて。

なのに由希はなんて言った？ 氣遣ってくれる彼女になんて答え
た？

何故間違っていると言われるのか、今もまだわからない。

真弥の説得はすべて心を突き刺すけれど、その意味はわからない。
わからないけれど現実を言い当てていることが、すべて真実なの
だと教えている。

そのことは辛くても認めた。

わからないけれど。

でも、たったひとつわかったことがある。

由希は間違えた。

瑠璃がなにを不安に思い、問いかけてきたのか悟ってやるうとも
しないで、そのとおりだと言ったのだ。

純粋な彼女をどれほど傷つけただろう？

なにもかもすべてがこんなふうに単純明快なら、由希も間違っ
ていると言われても納得できたかもしれない。

だったら、何故と誤ってしまふのは、由希の傲慢なのだろうか。

「あなたがなにを言いたいのか、あたしにはわからないわ。でも…
…真弥」

「由希？」

「あなたの言っていることがすべて本当で、みんなあたしのことなんてどうでもよくて、いやいや付き合っていたなら、どうしてそう言わないの？ 間違っていたらどうして責めないの？ それで気づけとか言われてもできないわよ」

「そうだね」

真弥がため息をついたとき、不意に奥の部屋から由希の父が現れた。

「それはね、由希。君がわたしの跡取り娘だからだ」

「父さん」

「おじさん」

正面から由希を糾弾していたことを悔いるような声を出す真弥に彼は笑ってみせた。

そして言った。

一言。

「ありがとう、真弥」

「「え……」」

「由希のために敢えて憎まれ役を買って出てくれたのだろうか？」

気まずそうに顔を背ける真弥を、由希が意外そうにみた。

その彼の態度が事実だと告げていたけれど。

「どうして礼を言うの、父さん？ なにがあたしのためなの？」

「わからないかい？」

振り向いて問われて頷いた。

「真弥は由希のためになることしか言っていないよ？」

「どじがっ」

感情的に言い募ろうとする由希を、父の優しい声が遮った。

「全部」

一言で断言されてしまって、由希はもうなにも言えなかった。

「今のままでは由希に救いはない。だれの好意も得られない。だから、真弥は憎まれるのを承知で、由希に隠していた事実を伝えた。これが彼の誠意でなくてなんなんだい、由希？ もしこれがただの陰口だったりしたら、正面から由希を糾弾してわたしの元を去った真弥はどうなると思う？」

「この部落にいらなくなるだろうね、ぼくは」

淡々と真弥が答えて啞然と彼を見た。

そういつことは由希は一度も考えなかったのです。

第4章 破滅への予兆（6）

「まだわからない？ みんなそれを恐れて、なにを言われてもきみに従っていただけだよ、由希。由希が大事にされていたのは、おじさんの威光。きみへの好意じゃない」

「真弥」

「ぼくはもつと幼い頃から、そのことには気づいていた。どうしてみんながきみに従ってみせるのに、根のところでは合わせないのか。気遣うことすらしないのか。」

そしてそんなみんなを増長させたのが、きみのどんな態度なのかすべて知っていた。だから、昔は何度もこんな言い争いをしただろっ？」

「あ……」

遠い幼い日を思い出して由希が絶句する。

たしかに同じようなやり取りをした時期があった。

もう忘れかけていたけれど。

真弥の説得はまだ続いた。

真弥が幼すぎて由希を説得するには役不足だったこと。

由希のためを思うなら父に相談して任せべきだとわかっていたこと。

でも、当時から真弥は諦めるのが早かったから、両親を亡くしてから諦めることで生きてきたから、そのときもすぐに諦めてしまったこと。

その理由こそ説得しても由希が理解しないとわかっていたからだとわれ、由希はもう答える言葉がなかった。

「今なら間違っていたことがわかるよ。こんな事態になる前に間違いは間違いだと、どれほど対立しようと指摘するべきだった。そうしたら今頃由希はひとりぼっちにならなかった。そう……気づいたから」

真弥の口調は真摯で彼が本心からそう思っていることが伝わってくる。

なにを言っても見せていた真弥の微笑。

あれは……諦めからきていた？

同意でもなんでもなかった？

すべてが由希の思い違い？

「由希」

父の声に振り向けば、ここまでひどいことを言われているというのに、怒っている様子はなかった。

それが尚更由希を追い詰めた。

「わたしもね。気づいていたんだよ。由希がどういう境遇にいるか。何度かは諭そうと思っただけけど、真弥と同じ理由から諦めていたんだ」

「父さんまで」

「由希は周囲の本音がどうであれ、否定されたことがないから、間違っていると言われても受け入れなかっただろう？」

「理解する姿勢すら見せなかったらどう？ だから、娘がどんどん孤立していつているのがわかって、わたしたちにはなにもしてやれなかった」

「……」

「その余波がすべて真弥にいつていることにも気づいていた」

「え？」

「どういう意味かと彼を見たけれど、真弥は自分のことについては、なにも言わなかったのである。」

「父の言葉を信じるなら、自分の被った被害については、文句ひとつ言わなかったのである。」

「それが父の言葉を肯定する形になっていた。」

「真弥の言動は意地悪でもなんでもなくて、本当に純粋に由希への思いやりだと。」

「真弥が独り立ちしたいと、この家から離れたいと言ってくる気持ちも、わたしたちには理解できた。いつか言い出すだろうと思っていたよ。そうさせたのはわたしたちだ」

「……父さん」

「もう解放してやりなさい。真弥は十分耐えてきた。きみのためにたくさんものを犠牲にしてきた。これ以上を望むのはただのワガママだ」

泣きたくて泣けなくて、それでもなにも言わない真弥を見ていた。

「おじさん。色々とお世話になりました。明日この家から出ていきます」

「……そうだね。止めることはできないけれど、ささやかな祝いだ。家を用意しておいたから」

「でも」

「由希のためにここまで言ってくれたのは真弥だけだ。感謝してるよ」

「おじさん」

「できれば由希の気持ちに応えてあげてほしかったし、わたしとしても真弥を本当の息子にしたかったけれど、これ以上は望めないね」

実の子供にという申し出も、小さい頃から何度もあった。

そのすべてを断り続けたから、由希の問題から離れて説得しても無駄だと知り尽くしている口調だった。

迷ったが真弥は言っていた。

今まで育ててくれた彼への恩義を無にしないために。

「そうできればよかったですと思います。でも、ぼくはもう……」

「恋人でもできたかい？」

父の優しい問いかけに由希は衝撃を受けた顔で真弥を見た。

想い人がいるらしいとは聞いているが、付き合っているとは聞いていなかったのです。

「命懸けで愛している人がいます。命懸けで愛してくれている人がいます。これからのぼくはその人のために生きたいと思っていますので」

「そうか。幸せにおなり。いいね？」

それが饒別の言葉だと知っていた。

頷いたけれど真弥の決意を知ったら、彼はどう思うだろうか。

部落を護る巫女を連れて逃げるつもりだと知ったら。

でも、譲れないから。

この生命を捨てることになっても、この恋は捨てられない。

世界中を敵に回しても。

真弥の決意は表情に出ている。

由希は顔も知らない彼の恋人に嫉妬した。

理不尽だろうが間違っていようが構わない。

赦さない。

そう心に誓っていた。

第4章 破滅への予兆（7）

破滅の足音が聞こえる。

途切れることなく、でも、しっかりと聞こえてくる。

悲劇の幕を開けるのは常に人の愚かな嫉妬や羨望なのかもしれない。

だれが悪いわけでもない。

ただわたしにはこうする以外に術がなかった。

心は決まった。

真弥も裏切れない。

でも、友達としての由希も裏切れない。

わたしは何故ここにいるのだろう。

失われるべき力。

忌まわしき楔。

それでもわたしは最期まで誇りを持って生きるでしょう。

誇りを持ってそのときを迎えるでしょう。

祈りよ、どうか天に届いて。

わたしの最期の望みを聞き届けて。

どうか……あの人を護ってほしい。

それだけがわたしの生命を懸けた願いなのだから。

真弥と愛し合って夫婦となつてから、彼とは何度となく逢つていた。

彼との逢瀬の時間はとても満ち足りていて幸福だった。

結ばれる度にささやかれる愛の告白が嬉しかった。

そうして結ばれる回数が増えるほど瑠璃は力が増してくるのを感じていた。

もしかしたら瑠璃は歴代の巫女と、なにからなにまで違うのかもしない。

瑠璃にとって真弥との関係は、彼愛されることで力は増幅される宿命を持っているようだった。

力が鋭くなればなるほど、瑠璃には由希の気持ちがよく視えた。

どれほど純粹に真弥を愛していたか。

どうして孤独になるのかわからずに困惑していたのか。

今の瑠璃には手に取るようにわかる。

だから、決めたのだ。

真弥も由希も裏切れない。

そのために自らを滅ぼすことになっても、どちらかは選べないのだから、自分に正直に生きようと。

例えそれで……生命を墮とすことになるうとも。

「ねえ、真弥」

森が雪景色に染まる頃、瑠璃はいつものように真弥に甘えながら、不意に夢見るように口にした。

「可愛い赤ちゃんが欲しいわね？」

「瑠璃」

狼狽した真弥が赤くなったり青くなったりして取り乱している。

「貧しくてもいいの。大切なあなたと愛する子供たちに囲まれて平穩に暮らすの。特別なものなんてなにもなくていい。愛するあなた

と子供たちに囲まれて暮らせたなら……どんなに幸せでしょうね?」

「これから叶えられる夢だよ、瑠璃。叶えられるように命懸けで努力するから」

「……そうね」

瑠璃の複雑な声の意味にも気づかずに真弥は笑って付け足した。

「失えないものなら生命に換えても護るしかない。ぼくはきみとこれからぼくらが得る子供たちのために生命を懸けるよ、瑠璃」

真摯にささやかれる真弥の決意に瑠璃は胸の内で答えた。

(わたしにはその一言で十分。あなたを愛して、そしてあなたに愛されて、わたしは幸福だったわ。だから、どうか……わたしの裏切りを許してね、真弥)

第4章 破滅への予兆（8）

最後にと決めた真弥との逢瀬から戻ってすぐに瑠璃はこのところ、お互いに避けていた由希と正面から向き直った。

由希は相変わらず瑠璃の外出の片棒を担いでくれているし、避けてはいるものの、あのときの発言を後悔しているのか、時折居たたまれないような目をして顔を背ける。

そんな彼女に気づいたから、尚更瑠璃は裏切れないと思った。

彼女を裏切って自分だけ幸せな逃避行に走ることなどできそうになかった。

それがやがて悲劇を招くとしても、瑠璃は由希に生命を預けようと決めていた。

ほんのすこしでも瑠璃を友達だと思ってくれていたら、由希は思い止まってくれるかもしれない。

もしくは友達だと親友だと思っていたからこそ、裏切りが許せず激情のままに突っ走るかもしれない。

でも、そのどちらだとしても瑠璃は静かに受け入れる覚悟だった。

それが真弥への愛の証。

そして由希への偽りのない友情の証なのだから。

「ねえ、由希？」

不意に声をかけられて由希が戸惑った表情で振り向いた。

後悔と焦燥と言葉にならない色んな気持ちが由希の瞳に浮かんでいる。

「あのときにあなたの友情の意味は聞いたわ」

「……瑠璃さま」

後悔しているのか、由希の声はとても苦かった。

「それでもわたしはこう思うの。あなたの友情の根底にあるものが、わたしに対する同情だとしても、あなたほど自尊心の高い少女が、それだけの動機であれほど親身になってくれるわけがないわ。だから、あれはそういったことが不得手なあなたなりの最上級の友情だったと、わたしはそう思うのよ」

「瑠璃さま」

由希の声は泣き出しそうだった。

もう許してもらえないと思っていたのかもしれない。

でも、これから瑠璃が告げる内容を聞けば、おそらく由希の感想はまた変わるだろう。

今度こそ手酷く裏切ったと判断して、ひどい罵声を浴びせられるかもしれない。

それでも彼女を友達だと思うなら、避けて通ってはいけない道だった。

「わたしはあるとき、あなたを説得するとき、こう言ったわね？結婚することなんてありえない巫女だから、あなたの気持ちはわからない、と。わかってあげたくても、わかってあげられないと」

「……なにをおっしゃりたいのですか？」

わからないと小首を傾げる由希に、瑠璃は苦い気持ちで言を継いだ。

「あれは……嘘よ」

「え？」

言葉の意味がわからないと、由希の顔には書いていた。

「わたし……愛している人がいるの」

「瑠璃さまっ。それはっ」

仰天する由希に瑠璃は静かに答えた。

「ええ。絶対的な禁忌よ。巫女としては赦されない大罪だわ。でも、わたしだって普通の女の子よ。だれかを好きになって何故いけない

の？ 彼を夫に迎えたことを、わたしは悔やんではないわ」

「お生命と引き換えなのですよ？ それなのに」

「そうね。それでもいいと思っているわ」

微笑む瑠璃の無謀さが、そしてそこまでだれかを愛せるといふことが、由希には信じられなかった。

愛する人を夫に迎えたと言った。

すなわちバレれば極刑を意味するのだ。

聡明な瑠璃がそれを知らないはずがない。

それでもいいのだと言い切った彼女に驚いた。

だが、本当に驚くべきことは、由希を傷つける現実が、このあとに用意されていた。

「真弥を……………愛しているのよ、由希……………」

この一言を聞いたとき、由希は幻聴だと自分に言い聞かせようとした。

それこそ必死になって。

よりによって真弥の妻が瑠璃だったなんて、由希は絶対に信じられなかったのだ。

「あなたが……真弥の……巫女が夫を迎えれば力が失われ、部落を
危機が襲うというのに、すべてと引き換えにしようというのですか
？」

感情が激しすぎて却って凍ってしまったかのような声だった。

第4章 破滅への予兆（9）

「いいえ。真弥を夫に迎えてからも、わたしの力は失われてはいないわ。むしろ急激に増しているほどよ。歴代の巫女がどうだったのかは知らないけれど、わたしにとって真弥が夫として愛してくれることは、巫女の役割に支障を来してはいない。むしろ力を増幅してくれているわ」

瑠璃がここまで言ったときだった。

それまでただ震えているだけだった由希が、たまりかねたといったように激情を爆発させたのわ。

「あたしは……確かに同情が勝っていたかもしれない。でも、瑠璃さまの力になりたいと、笑ってほしいと、その思いに嘘はなかった。だから、危険も犯したし、瑠璃さまが明るくなっていくのが嬉しかった。なのに利用したのねっ！？ あたしの友情を利用したのねっ！！ この売女っ！！」

涙を溢れさせる由希に瑠璃は慌てて言い返した。

「違うのよ、由希っ。わたしも真弥も愛し合ったときに、夫婦となるまでにあなたの存在に気づかなかったのよっ！！ わかっついて選んだ結果ではないのっ！！ お願いつ。わかっついて！！」

「偽善者っ」

低く吐き捨てられた言葉に瑠璃は胸を抉られたような気がした。

傷ついた瞳で由希を凝視する。

「これだけは信じてちょうだい。わたしはあなたを親友だと思えばこそ、誤解されるのを承知で打ち明けたの。これだけは信じて」

必死の瑠璃の呼び掛けも、とうとう由希には届かなかった。

まだ陽も高いというのに神殿を飛び出してしまったからである。

これから彼女がどこへ行こうとしているのか、そしてそこでなにをするつもりなのか、瑠璃には視えていた。

避けられない運命が死の影を伴って徐々に近寄ってきていた。

どうしても溶けなかった凍てついた心。

やりきれない想いが溢れ、涙が一滴零れた。

泣きながら神殿を飛び出して、どこをどう走ったのか。

涙も枯れてしまった頃に由希は村長の家の前に佇んでいた。

麻痺してしまった感情と思考の中で、瑠璃の愚かさを嘲笑うような、酷薄な笑みが口許に浮かぶ。

（バカな人。行動を監視しているあたしに向かって、あんなことを打ち明けるなんて。そうよ。これはあたしの義務なのよ）

巫女が禁忌を犯したなら、それを報告するのが由希の役目。

わかっていて打ち明けた瑠璃がバカなのだ。

それとも純粹培養された愚かな瑠璃は、それすら気づいていなかったのかもしれない。

死ねばいい。

心の底からそう思った。

そうして由希を愛せないと突き放し、その裏で瑠璃を選んだ真弥も、由希と同じ痛みを感じればいい。

別人のように冷酷無比な冷酷な笑みを浮かべ由希はそう思った。

心が麻痺してしまえば、人はどこまでも残酷になれる。

由希は今完全に自分を見失っていた。

瑠璃が何度も訴えた想いすら歪んで解釈している。

死ねばいい。

その一言だけを胸に由希は村長を呼び出した。

第4章 破滅への予兆（10）

「おや？ どうしたんだね、由希？ いつもならまだ神殿にいる時刻だろう？」

瑠璃に戦を禁じられ、比較的暇だったらしい村長が、どこかのんびりと現れた。

「今日は大事なご報告があつてやつて参りました」

「大事な報告？」

「はい。巫女さまが禁忌を犯されました」

「なんだつてっ!？」

蒼白な顔色になる村長に由来は虚ろな瞳で報告を続けた。

幾分、話を脚色しながら。

「巫女さまは男と通じられたそうです。夫を迎えたとはつきりそうおっしゃいましたから」

「男と通じればどうなるか知らぬ巫女殿でもあるまいにっ!！」

「はい。今ではかつての力の半分も残っていないとか。それも日増しに弱まっているそうです。このあいだの戦を止めたのも、託宣ができるだけの能力が残っていなかったからだとか」

「……愚かな」

村長の苦々しげな声に由来は口許だけで笑った。

それはゾツとするような冷やかな笑みだった。

「聡明な巫女殿だと期待していたというのに恋に狂ったかつ」

吐き捨てる村長は由希を振り向いた。

「報告ご苦労だった。由来はもう今日から神殿へは行かなくてもいい」

「はい」

慌ただしく動き出した村長を見送って由来は家への帰路を辿った。

瑠璃はそう遠くない未来に処刑されるだろう。

当然だ。

由希の友情を利用し、泥棒ねこのように大切な真弥をまんまと奪っていったのだ。

彼女はそんな目に遭っても当然の罪を犯したのだから。

家へ向かう途中でふと気になった。

真弥はどうしているだろう？

今日も瑠璃と逢えるときを待っているのか。

そのことに思い至ったとき、由来は再び残酷な思いに心が支配されていくのを止められなかった。

しばらく真弥の姿を探せば、神殿と村のちょうど中間に位置する湖にその姿があった。

ぼんやり散歩をしているようにも見えたが、チラチラと周囲に視線を走らせる姿を見ると、だれかを待っているようにも見えた。

おそらく瑠璃を待っているのだろう。

彼女の身に起きた変事にも気付かずに。

だったら教えてやろう。

真弥はもう二度と彼女には逢えないのだと。

それがふたりして由希を利用し裏切った代償だと。

「瑠璃さまを待っているの、真弥？　だったら無駄なことよ。あなたは二度と瑠璃さまには逢えないわ」

その一言に真弥が弾かれるように振り向いた。

「由希？　それは一体どういう意味なんだい？」

「瑠璃さまは近い将来処刑されるわ」

「なっ」

声が詰まっって言葉にならない真弥を由希が冷やかに見詰めている。

「バカよね。あたしが傍にいる意味くらい知っているでしょうに、そのあたしに向かって、あなたのことを打ち明けるんだもの。こうなっって当然よ。ふたりしてあたしの友情を利用して裏切っっていたんだから」

狂っったように声を上げて笑い出した由希を真弥は信じられないと見詰めていた。

だが、徐々に事情が飲み込めてくると、どうして瑠璃が由希に打ち明けたのか、真弥にはわかるような気がしていた。

命懸けの彼女の友情。

なのに由来は冷酷な笑みを浮かべている。

我慢できなくて由希の肩を掴んで揺さぶった。

「きみが密告したのかっ!?! きみが瑠璃の命懸けの友情を踏みにじっったのかっ!?!」

「命懸けの友情? なにが? あたしの友情を利用して、聖人面をしてあなたを奪っっていくことが?」

死ねばいいと、それが当然の罰だと嘲笑う由希を見て、真弥は生まれて初めてだれかに手を上げた。

傷付けることは愚か、ケンカすらしたことのない真弥が、生まれて初めて人を叩いたのである。

あまりの衝撃に座り込んだ由希が、憑き物が落ちたような顔で真弥を見上げている。

第4章 破滅への予兆（11）

「きみを見損なつたよ、由希」

「……」

「本当に裏切られたと思っていて、ぼくや瑠璃を責めているなら、その問題で正々堂々と言い争えばいいだろう？ ぼくも瑠璃も逃げやしないよ。きみは自分の手を汚していないから、自覚していないのかもしれないけど、きみの密告で瑠璃が処刑されたら、きみが瑠璃を殺したことになるよ。遠回しに仕組むことだね」

冷たい心を貫く氷柱のような声に、由希は今更のように、自分がしでかしたことの重さがわかってきて震えていた。

「そんなきみをぼくが選ぶと思った？ ぼくがなにをきらっているか、由希が1番よく知っているはずだろうっ！！」

「あたし……あたしは……」

「今のきみは人間として最低だ。瑠璃は殺される可能性があるのを知りながら、きみへの友情を証明するために、生命すら懸けてきみに真実を打ち明けたのに」

「あっ……」

真弥の言葉の意味が呑み込めて、由希は茫然自失の状態で、じつと両手を見詰めていた。

今になって瑠璃の告白の意味が分かる。

彼女は聡明な巫女だ。

ましてや力は失われるどころか、真弥を夫としたことで増しているとも言っていた。

その瑠璃が由希の行動を読めないわけがない。

それでも一縷の望みに賭けて、そして自分の友情を証明するために、彼女は生命すら由希に預けたのだ。

(なのに……あたしはなにをしたんだろう?)

人を殺すことの恐ろしさが、今頃になって身に沁みてくる。

怖くて震えが止まらない。

そのとき、もう由希には目もくれずに、真弥が踵を返した。

「真弥っ。どこへ行くの？」

「瑠璃を助けに行くんだ」

「無理よっ。瑠璃さまは処刑が決定された時点で、極秘部屋である牢獄に移されるわっ。人を殺すことはおろか、傷つけることもできないあなたに一体なにができるのっ!? あなたまで殺されるだけよっ!! お願いよ、やめて、真弥っ!!」

必死に追いつがる由希を、真弥は一度だけ振り向いた。

凜とした瞳の中に強い意思を煌めかせて。

「瑠璃のためなら、ぼくは人を殺せる。そうして必ずふたりで生き延びて幸せになるんだ」

信じられない宣言に由希は呆然としていたが、ややあつて遠ざかっていく背中に叫んだ。

気も狂わんばかりに。

「それでも無理よ、真弥っ。巫女の処刑が決定された後の神殿の警備は、あなたが考えているほど甘くないわっ！！」

「瑠璃ひとりを死なせはしない。そのときはふたり一緒だ」

風に乗って返ってきた答えに由希はボロボロと泣いた。

どんなことをしても、真弥はもう由希を振り向かないのだと思いついて。

もし村長に逢う前に真弥に逢っていたら、由希の行動は変わっていたかもしれない。

それでも自分で動かしてしまった運命の歯車は止められない。

そのことを噛みしめて由希は泣いた。

大切なふたりを自分が窮地に追い込んだのだと噛みしめて。

第5章 時代を越える想い(1) (前書き)

今回から最終章です。

第5章が終わったら終章で完結となります。

もうしばらくお付き合いください。

ブログの方が完結したら、毎日、もしくは週2、3回の配信になるかもしれませんが。

完結してしまえばブログを待つ必要がないので。

終章については第5章の配信が終わった1時間後に配信します。

それで本当に完結です。

よろしく願います。

続編については現在公表を思案中です。

かなりご都合主義なハッピーエンド作品なので、こちらの余韻を大事にするなら、発表しない方がいいのかな、と。

とりあえずもうしばらく続きます。

第5章 時代を越える想い(1)

それまでの生活とはまるで無縁な冷たい石牢の中で、瑠璃はじつと姿勢を正し祈りを捧げていた。

巫女を殺すことは禁忌。

それは力ある巫女を指していて、別段巫女の力を失くした者は含まれていない。

力ある巫女を殺すことが禁忌とされているのだ。

力ある巫女を殺せば、その力の強さの分だけ殺した者に、その部落に災いが起こる。

だからこそ、どの部落も力ある巫女や神官は生け捕りにして、自分たちの部落の守護をさせようとする。

殺せないなら、それしか方法がないからだ。

背かれれば災いが起きると知っているから。

瑠璃はあの後すぐに村長配下の者に連行され、牢獄に閉じ込められた。

それまでの豊かな生活からは考えられない場所へ。

それもみな承知のこと。

静かに受け入れ抵抗すらない瑠璃に兵士たちは戸惑ったようだった。

巫女としての凜とした気高さを失わない瑠璃に感服した者もいる。

瑠璃は自らの運命を受け入れていて、別に抵抗する気も逃げ出す気もなかった。

ただ静かにその時を待っている。

村長が兵士を連れて現れたときも、捕らえる旨を告げられたときも、瑠璃は全く驚いた様子がなく、ただ静かに頷いただけだった。

これには兵士だけでなく、村長も驚いていたが。

力が失われているなら、自分の運命などわからないはずで、こつとして捕らえられる段階になったら、多少なりとも取り乱すのが普通である。

だが、瑠璃は当たり前のこととして受け入れていたのだ。

村長には腑に落ちない態度だった。

まるでこつなることがわかっていたような潔い態度だったのである。

それだけではなく瑠璃の身の回りの物が、すべて整理整頓されて

いた。

まるでこれから死地へと旅立つ者が身支度を整えるときのよう
に、すべての物を粗方処分していて、まるで捕らえにくるのを待つ
ていたような印象も受けた。

あのときから村長は、どこか腑に落ちない気分で、瑠璃の処刑に
ついて悩んでいた。

本人が否定しないどころか、肯定しているのでは処刑はやむを得
ない。

だが、瑠璃の態度やことが起こった前後のことを考えると、どう
しても瑠璃が巫女の力を喪失したようには見えなくて判断を下せず
にいた。

まして捕らえられてからも全く取り乱さず、動揺すら見せずにた
だひたすらに祈りを捧げているのである。

瑠璃の態度は村長の理解を超えていた。

巫女の力を失った者として見るならば。

だが、巫女として見るなら特に不思議のない態度でもあるのだ。

巫女なら慌てるはずがない。

自らを襲う運命など、だれよりも早くわかるだろうから。

瑠璃はなにも言わない。

ただ祈りを捧げているだけだ。

そんな彼女に村長はやりきれない思いで問いかける。

「あなたほど聡明な方が、何故禁忌を犯されたのです、巫女殿？」

迷いの晴れない目で、いつものように現れた村長にそう訊かれ、瑠璃が多少うんざりしたように振り向いた。

「またその問いなの？ 何度も答えたはずよ。わたしも普通の女の子なのよ。不思議なことではないでしょう？ それにわたしはもう巫女ではないわ。ここに閉じ込められたときから。そうでしょう、村長？」

静かな、静かな声。

まるで悟りの境地にいるような神のごとき声音。

憎しみも悲しみもすべて洗い流されたような、神々しいほど清々しい表情が村長は怖かった。

もし彼女の力が失われていなかったら？

瑠璃ほどの力を持った巫女を殺したら、この部落くらいは簡単に滅びるだろう。

「では相手の名を教えてください。お話がすべて事実ならば、あなたの夫となった者がいるはずです」

「教える気はないわ」

あっさりとした拒絶に村長は「巫女殿っ」と声を荒らげた。

「彼はもうこの部落にはいないわ。旅の途中に立ち寄っただけだと
言っていたから」

「ならば名前くらいは言えるはずでしょう」

「知らないわ。行きずりだもの」

瑠璃は頑として譲らない。

相手の名も素性も知らないと。

村長には庇っているようにしか思えなかった。

仮に瑠璃の主張通り巫女もひとりの少女だとしよう。

だが、瑠璃はまだ年若い少女とは思えないほど聡明な巫女だ。

幼い美貌には不似合いなほどに大人びた叡知を秘めた少女。

その瑠璃がそんないい加減な恋をするとは、どうしても思えな
かった。

部落と引き換えにするほどの激しい恋。

命懸けの恋をするなら、それに相応しい相手であるはずだ。

もしくはそんな相手など最初から存在していないか。

どちらかだ。

第5章 時代を越える想い(2)

村長は瑠璃を正當に評価していたから、彼女がそんな浮わついた恋で部落を引き換えにするような行動に出るとは、どうしても思えなかったのである。

だが、これ以上問い詰めても、瑠璃はなににも言わないだろうと思えた。

彼女はもう覚悟を決めてしまっている。

死を受け入れて覚悟した者になにを言っても無駄だ。

「ではこれだけは答えてください。真実で。あなたは本当に巫女としての力のほとんどを失われてしまったのですか？」

この問いにも瑠璃は表情を変えなかった。

ただ静かな眼差しでこう訊いただけで。

「……由希がそう言ったの？」

「あなたからそう聞いたと。本当なのですか？」

そのとき、瑠璃がため息をついたように見えたのは、村長の錯覚なのだろうか。

「彼女がそう言ったのなら、そうなのでしょう。これ以上なにも答えることはないわ。そうっとしておいてちょうだい。村長。祈りの

邪魔をしないで」

なんのために祈るのか、瑠璃はなににも言わず、また壁を向いて手を合わせ、目を閉じてしまった。

これ以上居ても無駄かと、村長は諦めて立ち上がった。

どうしても気になる。

瑠璃は本当に力を失っているのだろうか。

本当に夫を迎えたのだろうか。

今はその真偽を確かめる術もない。

そうだと言われれば信じるしかないのだ。

では、由希が嘘を言ったとしたら？

由希と瑠璃のあいだで争いがあった、由希が瑠璃を陥れようとしているとしたら？

彼女の性格では不思議はない気がした。

立ち去りかけて、さりげなく村長は訊いてみた。

「あなたは本当に夫を迎えられたのですか、巫女殿？ 単なるあなたと由希の争いではないのですか？」

すべてが由希の出任せではないのかと問いかける声に、瑠璃がふ

つと振り向いた。

「いいえ。わたしには夫がいます。それは単なる事実だわ、村長。もし由希とケンカをしていて、彼女がそういった嘘を言ったのなら、幾らわたしだって素直に従うわけがないでしょう。友人とのケンカに生命まで賭けはしないわ」

瑠璃の口調には嘘がなかった。

村長は苦々しい顔で立ち去るしかなく、彼がいなくなってから、瑠璃はため息をつくと心の中で付け足した。

そう。

友達とのケンカなんか生命を賭けたりしない。

でも、友情を証明するためなら、恋と友情を秤にかけないためなら、わたしは生命を賭けるわ。

真弥への愛情。

由希への友情。

そのどちらもが瑠璃にとって重い。

だからこそ、由希を見捨てて本当に裏切ることができなかった。

それでは彼女の感想通り自分たちは由希の友情を利用したことになるから。

命懸けにもなる。

その結果がどうなるうとも。

けれどどうか真弥だけは護ってほしい。

この生命が失われることで、どんな災厄が起こっても、真弥だけは助けてほしい。

彼は瑠璃の魂だから。

それだけを天に祈りつづけた。

夕刻が近づいている。

冬が近づいている今、夜の訪れは早い。

暮れていく時間もずっと早くなっている。

木立の影から神殿を見上げつつ、真弥は苦々しい顔をしていた。

想像していた以上に警備がきつい。

どこからどう探しても侵入できそうなところがなかった。

巫女を戴くことが長かったせいで、こういった事態にも慣れているのか、蟻の入る隙もない警備だ。

いつも通り帰っていく村長の顔色は冴えない。

それは部落を守護する巫女を失うからなのか、それとも違う理由からなのかは、真弥にはわからない。

一度は瑠璃との恋は諦めて、彼女の力が失われていないことを村長に告げようかとも思った真弥だったが、瑠璃の決意を思うとそれもできなかつた。

彼女は真弥も由希も選べなかつた。

そのために生命を賭けた。

ここで彼女の生命を救うために真弥が事実を打ち明け、自分こそが瑠璃の夫だと打ち明けて、もし殺されたり、軽くて部落を追放された場合、瑠璃が後を追いついで怖かつた。

死ならば諸共。

その覚悟は瑠璃も同じだと思えたから。

第5章 時代を越える想い(3)

何故だろう。

共に過ごした時は短い。

儂い一瞬の錯覚のような日々だったのに、瑠璃の面影は鮮やかに心に刻まれて、彼女がなにを考えているか、どうしてそうするのか、真弥には手に取るようにわかった。

だから、真弥が殺されなくても、この部落から追放されたら、おそらく逃げ出せない瑠璃は生命を絶つだろう。

そう……わかる。

だったら万にひとつの可能性に賭けて、共に生きられる未来を夢見たい。

それがダメなら死ぬときは、ふたり一緒だと決めた。

由希にそう告げたときの決意のままに。

ただ悔やまれるのは彼女の決意を見抜いて止められなかったことだ。

巫女の力に触れなかったことが、真弥の最大の誤算だった。

瑠璃のこの行動には巫女の力が絡んでいると、今ならわかるから。

由希の辛さを無視して自分だけ幸せになるには、なにかもわかってしまう瑠璃の力が邪魔だったのだ。

そのことに気付いていれば、彼女が行動を起こす前に奪うこともできたのに。

それを思うと凄く悔しかった。

普通の少女として扱うことが、瑠璃を救うと思って、真弥はそのことばかり意識しすぎたのだ。

瑠璃自身にとってはそれが救いでも、巫女の力は現実。

それが招く未来も踏まえて動くべきだった。

今更考えたところで結果は変えられないが。

完全に陽が落ちて夜が訪れると、神殿の篝火に照らされた森は一気に静寂を増した。

襲撃するなら夜がいいかと思ったこともあるが、こうして見ると却って不都合が多いことがわかる。

真弥には光源がないが、神殿を守る兵士たちには篝火という確かな灯火があるのだ。

向こうは真弥を見付けやすいが、真弥は姿を隠せば身動きが取れず、姿を現せば格好の的になる。

そう悟らざるを得なかった。

篝火は襲撃に備えた位置にあつて、守護する者には有利でも、襲撃する方には圧倒的に不利になるように配置されている。

位置を見るだけでわかるのだ。

どこから攻撃を仕掛けても、おそらく真弥にはるくに周囲が見えなくて、迎え撃つ兵士にははっきりと真弥が見えるだろうというところが。

「夜は逆効果、か」

ひっそりと呟いて踵を返した。

今夜のところはここまでだ。

村長が帰った以上処刑は行われない。

処刑は村長の立ち会いがないとできないからだ。

つまり明日村長が神殿を訪れるまでの生命は保証されたことになる。

その繰り返しで1週間だ。

早く助け出したい。

方法を探り、瑠璃の居所を探すだけで、無為に過ぎていった日々。

残された時間が短くなるほど心が焦る。

だが、どこから探っても隙はない。

つまりどう攻めても結果は同じということだ。

なら。

「正面突破しかないな。どこから攻めても同じなら、力づくで正面を突破するまで」

低く呟いた。

できれば早朝がいい。

人々が交代する時間帯を狙えば、その分、隙が生じる。

それに夕刻の交代と違って、早朝は気が緩む傾向にある。

何故かというとな夜を越えたからだ。

朝になれば人間の心理としてホッとするものだ。

それが交代の時刻なら尚更。

最大の油断、だ。

だが、その頃には村長がやってきて機会を得られない。

しかし最悪の場合、時間帯なんて気にしている余裕なんてないだろう。

村長が離れたときに最大の機会だから、それが夜以外ならやるしかない。

「離れている時間が辛いよ、瑠璃」

ささやきが閉じ込められている彼女の元まで届けばいいと思う。

あれからだれとも連絡を取らず、ほとんど接触も持たない真弥は、由希の父が用意してくれた家も出て、適当に見付けた狩猟小屋で過ごしていた。

ずいぶん前に捨てられたのか、この部落で生まれ育った真弥も知らなかった。

それを利用するようになったのも1週間前からだ。

今はだれとも逢いたくない。

そう思って歩を進めようとしてギクツとした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8495s/>

失われた恋人～時に消えた伝説～

2012年1月2日09時50分発行